

**BEYOND 20XX**  
*The future we dreamt about*

**BEYOND  
20XX**

A child with colorful hair is visible through a yellow, box-like structure. The entire scene is set against a red background. Large white text with a thick black outline reads 'BEYOND' and '20XX'. A large, thick red 'X' is drawn over the '20XX' part of the text.



# BEYOND 20XX

## The future we dreamt about

FAC XX: Currently, beyond 20XX | ビヨンド 20XX 現在

コンテンポラリー・アート・ミュージアム

### 現代美術館はいかにして可能か ——山本高之が問いかける未来

「現代美術」という概念の広まりと、美術館における教育普及部門が整備されていく時期が、一致していることはおそらく偶然ではない。「近代美術（モダン・アート）」が、「コンテンポラリー（共有された [Con] 東の間の時間 [temporary]）」という語に取って代わり、「現代美術館」という呼称が一般的になっていく90年代以降、美術館は、歴史を司るよりも、現在の時間の流れのなかで、アクチュアリティを追求することを重視していくようになる。2006年に『オクトーバー』誌が大々的に行った、「コンテンポラリーについてのアンケート」では、美術館が「現代の美術」ではなく「新しい美術」を提示する場になったことをはじめ、この新しい時代区分がもたらしたポスト・ヒストリカルな状況についての数々の指摘を読むことが出来る[\*1]。アクチュアリティの追求の影響として、テンポラリーな「アート・プロジェクト」や芸術祭が勃興していくことについての指摘もある。これらのことは、概して言えば「物」から「観客」へ、美術館の主役が移ったということだ。教育普及の重要性は、こうした過程のなかで取り上げられていくようになる。

一方で、こうした変化は、美術館に新たな悩みをもたらすことになった。「現在（コンテンポラリー）」性と、美術館が表象してきた歴史的な時間とのあいだの齟齬をどう埋めるのか。さらに現代美術は、未知なるものを追求するという点で、本質的に拡張性をはらんでいる。過去と現在、未来の緊張関係のなかで揺れ動く領域を、どのように統御するのか。そしてこれらの問題は、教育という、いわば未来をいかにデザインするかという領域にも共通している。特に美術教育は、社会の複数性を担保するための思考の枠組みに寄与するものとして、正解のない「わからない」事象や、他者を理解するための入り口と見做されてきた。イギリスのテートをはじめとする美術館が、一方通行の「エデュケーション」ではなく、ともに学び合う「ラーニング」というコンセプトが掲げ、これが世界的に伝播していったのもこの経緯による。美術教育においては、指導する／されるという関係ではなく、教える側も常に形骸化を疑い、自らの変容すら恐れずに、時代に即して学び手の主体的なアクションを促す媒体となることが求められる。

さて、小学校の美術教師としてのキャリアを持ち、美術教育をモチーフに作品を発表してきた山本高之は、ここまで述べてきたような、未知なるものを掴もうとする、現代美術と美術教育のコンセプトの重なりに着目してきた作家である。本展において、『AKIRA』の舞台である2020年東京オリンピック開催の1年前のネオ東京に思いをはせつつ、近未来における美術館像について考えるというテーマを掲げた山本は、その理由をこう述べる。「美術館でのラーニング（学び）のプログラムについて考えることは、すなわち未来の社会を考えることと同義だからである。教育は大人が理想とする未来の社会の形を反映したものである」[\*2]。一見、遊びの延長のような作品が並ぶなかで、「ラーニング」というテーマから山本が問いかけるのは、ではそれを掲げる美術館は本当に、自らの変容を恐れずに、未知なるものに対峙する覚悟があるのかどうか、ということだ。本展のモチーフとして、サーフィンが一つのモチーフとなっていることは示唆的である。サーフィンの経験のない私のあくまで想像ではあるが、空間的にも時間的にも遠い地点で生まれた波が、今自分の目の前にあらわれる、その瞬間を予測して身を投げ出す行為は、過去と現在と未来が重なり合う一点を掴まえるようなものではないか。これはまた、前述



したように、現代美術という領域および現代美術館という枠組みが向き合うべき状況のメタファーともなりうる。

アーツ前橋の学芸員たちにサーフィンを体験させ、身体の変容を促す山本の意図はここにあるだろう。一方で、歴史を担う恒久的な組織であったはずの美術館にとって、変容すること、あるいは生々しい現在との邂逅は、常に予測できないリスクと向き合うことでもある。近年、世界中で美術館や芸術祭などのアート・インスティテューションとアーティストとのあいだで、検閲的行為を含む緊張関係が報告されることが増えたことと、「現在性」の追求という新たな命題は、確かに連動している。本展の記録集刊行にあたっては、作家に対する前橋市の契約不履行により、慰謝料が払われるという経緯が報じられている[\*3]。作家より提供された前橋市作成の調査報告書を読む限りでは、作家との意思疎通を、記録集編集担当を除く美術館側が蔑ろにしていた経緯が読み取れる。それはもしかしたら、山本が提示した「ラーニング」に対する、無意識の拒否反応なのかもしれない。本展が、この顛末も含めて、美術館や現代美術の領域に突き付けるものは重い。わからないもの、予測できないものとの真の出会いの場として、未来の美術館を更新することができるのか、私たちは議論を続けなくてはならない。

藪 前 知 子 （ 東 京 都 美 術 館 学 芸 員 ）

\*1 “Questionnaire on ‘The Contemporary’”, *October*, No. 130 (Fall 2009), MIT Press, pp. 3-124.

\*2 本記録集, p.7

\*3 「アーツ前橋、作家に委託料を未払い 前橋市が80万円を賠償する方針」『上毛新聞』2022年11月17日など

## How a contemporary art museum is made possible the future, as questioned by Takayuki Yamamoto

It is probably not a coincidence that the spread of the concept of ‘contemporary art’ and the development of education divisions in museums occurred around the same time. After the 1990s, when the term ‘modern art’ replaced the term ‘contemporary’ (con - together + -temporary - time) and a ‘contemporary art museum’ became a universal label, museums began to emphasize the pursuit of ‘actuality’ in the current flow of time, rather than just the preservation of history. In 2006, *October magazine* conducted an extensive survey – “Questionnaire on The Contemporary”. The results show that museums had become places for presenting ‘new art’ rather than ‘contemporaneous art’, and note the numerous post-historical situations created by this new transitional period of time.[\*1] The survey results also point out that the rise of temporary ‘art projects’ and art festivals is an effect of the pursuit of actuality. To sum up, the museum’s focus has shifted from ‘object’ to ‘audience’, and the importance of museum education has been increasingly addressed within these transitions.

At the same time, these shifts have brought new challenges for museums, including the question of how to bridge the gap between the ‘contemporariness’ and the historical timeline represented by museums. Furthermore, contemporary art is quintessentially expansive in terms of its pursuit of the unknown. How should its territory, oscillating in the tension between the past, the present and the future, be controlled? These questions are also relevant to education as the territory of how to design the future, so to speak. As a contributor to a framework of people’s thoughts that ensure social pluralism, art education, in particular, has been considered a gateway to acknowledging ‘unknowable’ situations, where there are no right answers, as well as to under-

standing others. This is the reason why Tate, and other museums in the UK, introduced the concept of ‘learning’, in which people mutually learn together, rather than ‘education’, which provides one-way communication. This concept has spread worldwide. In art education, educators should not aim to build a teaching or ‘being-taught’ relationship, but become a medium who can question the formality and, without fear of transforming themselves, encourage learners to take independent action in line with the times.

Takayuki Yamamoto is an artist who has a career as a primary school art teacher and has also presented works with art education as a motif. He has been focusing on the overlap between the concepts of contemporary art and art education in an attempt to grasp the unknown, as described above. For this exhibition, Yamamoto has set the theme of examining the near-future vision of art museums, while remembering the setting of *AKIRA*, the manga series: Neo Tokyo, one year before the 2020 Tokyo Olympics. The theme emerged because, as Yamamoto explains, “thinking about learning programs at museums is synonymous with thinking about the society of the future. Education is a reflection of the shape of an ideal future society for adults.”[\*2] Amidst a line-up of works that, at first glance, appear to be an extension of play, what he questions on the theme of ‘learning’ is whether the museums that uphold ‘learning’ are really prepared to confront the unknown without fear of their own transformation. The fact that surfing was chosen as one of the exhibition motifs is suggestive of this situation. A wave born at a spatially and temporally distant point appears in front of your eyes. Although I have no experience of surfing, I imagine that the act of throwing yourself out by anticipating the right moment of the wave might be like catching a point where the past, the present and the future overlap. As mentioned above, this action could be a metaphor for the situation that the field of contemporary art and the framework of contemporary art museums have to face.

It is probably Yamamoto’s intention to have the curators of Arts Maebashi experience surfing and encourage their physical transformation. On the other hand, for an art museum – which has been seen as a permanent organization responsible for chronicling history – transformation or an encounter with an uncertain present means constantly facing unpredictable risks. More and more cases of tension, including censorship, between artists and art institutions such as museums and art festivals, have been recently reported from around the world. This fact is certainly linked to the new proposition: pursuit of ‘contemporariness’. When publishing a record of this exhibition, it has been reported that payment was made to the artist for Maebashi City’s breach of contract. [\*3] As far as I could understand from the city’s investigation report, provided to me by the artist, it is clear that the museum, with the exception of the editors of the archive, had disregarded communication with the artist. This might be an unconscious rejection of the ‘learning’ presented by Yamamoto. Including these consequences, the implications of this exhibition for museums and the field of contemporary art are heavy. We must continue to discuss whether the museum of the future can be reformed as a place for true encounters with the unknowable and unpredictable.

T o m o k o Y a b u m a e

Curator, Tokyo Metropolitan Art Museum

\*1 “Questionnaire on ‘The Contemporary’”, *October*, No. 130 (Fall 2009), MIT Press, pp. 3-124.

\*2 Refer to page 8 of this catalogue

\*3 “Arts Maebashi fails to pay commission fees to artist. Maebashi City intends to compensate artist with 800,000 yen” Jomo Shinbun, November 17, 2022, and others.







## BEYOND 20XX

FAC 0: beyond 20XX | 第零章 ビヨンド 20XX

1988年7月16日、

大友克洋原作・監督によるアニメ映画「AKIRA」が公開された。

物語の舞台は2020年の東京オリンピック開催の1年前のネオ東京。

私たちは今、当時夢想していた未来に暮らしている。

近い未来に、アーツ前橋はどのような美術館になっているのだろうか。

その時、この美術館はどのような社会の中に存在しているのだろうか。

こうした問いから、この展覧会は始まっている。美術館でのラーニング（学び）のプログラムについて考えることは、すなわち未来の社会を考えると同義だからである。教育は大人が理想とする未来の社会の形を反映したものである。故に教育を考えることはその時点の大人たちについて考えることにもなる。私自身が教育現場に身を置いたり、様々な美術館で「教育普及」の活動をする中で、教育がテーマの一つとなっていたのはそうした考えに至ったからだ。

では、「アートを教える／教えられる」とはどういうことか。

通常、アートと教育（または美術教育）というと、お土産を持って帰るような形式化されたワークショップや、作家の意図を作品の「本当の意味」として理解するためのトークなど、およそ「アート」とは無関係な活動を思い浮かべる人も多いだろうし、実際そうしたことがそこで行われている。一方、学校では、「図画工作」や「美術」という教科として、教えられてきたが、それらもまた、「アート」とはほど遠いものである。絶えず未知の出来事との出会いの連続の中に生きている子どもたちにとって、様々な事柄を認識し、理解するために学校で学ぶ教科はとても有用である。ただし一つの単元の知識だけでは、この複雑な世界を認識することは不可能である。例えば「これは歴史の知識2割、社会の知識3割、あとは算数の知識2割と国語で養った文章読解能力2割で理解できるな」とか、「今の気持ちは体育で学んだ体の動かし方と音楽で最近学んだあの曲で表現できるな」などというように、知識や経験の組み合わせが必要になるはずだ。全ての教科で学んだ知識を統合する力は、アートによって養うことができるし、それをもってしかなし得ない。アートは、世界の見方を絶えず更新し、それまで気がつかなかった新しい視点を人々に提供し続けていく。こうして、私たちが認識できる世界はどんどん拡張されていくのだ。それは今まで気づけなかったやり方だから、既存の価値観で良し悪しを図ることはできない。まずは、それを体験してみないと始まらない。

さて、今回アーツ前橋と私が共同で行うこの展示は一風変わっている。アーツ前橋の未来（とそこでのラーニング・プログラム）を考えるために、館の内外にて行われた／行われなかった全ての活動の総体を「ビヨンド 20XX」という架空の近未来SF映画と見立てている。前述の通り、教育が未来の世界を反映しているのならば、それを考えることは脳内のSF的想像力への回路を開くことと同義であるからだ。未来は過去の蓄積を土台として築かれる。だからこそアーツ前橋の学芸チームに、ここであえて一旦立ち止まり、自分たちが属するこの組織の過去をそれぞれの視点で見つめて直してみることを提案した。そのお題に対する各学芸員からの回答が、このあと展開される第1章、「Beautiful harmony」である。未来を、流行を追いかけ新しいスニーカーに履き替えるように求めるのではなく、自らの意思で進む方向を決める主体であることを再確認するために。それらは、アーツ前橋を作り上げてきた基盤——「コレクション」「市民」「学芸員」を再考することになる。この先の第2章では、アーツ前橋の学芸チームは

- 01 寄稿 藪前知子（東京都美術館 学芸員）  
Contribution: Tomoko Yabumae (Curator, Tokyo Metropolitan Art Museum)
- 元担当学芸員が主張する、「学校関係者配布のためのアーツ前橋のラーニングプログラムを振返る冊子」という指示は、山本氏側に適切かつ的確に行った物証はないこと。そのような意思決定はどの時点においてもされておらず、本市として主張の継続が困難となっていること。
- 07 第零章 ビヨンド 20XX（テキスト：山本高之）  
FAC 0: beyond 20XX / Takayuki Yamamoto

- 10 第一章 ビューティフル・ハーモニー  
FAC 1: Beautiful Harmony
- 18 寄稿 郡司明子（群馬大学 美術教育講座）  
Contribution: Akiko Gunji (Art Education Course, Gunma University)
- アーツ前橋のラーニング、向かう先はアンラーニングである。「図工と道徳」のトークから  
Learning toward un-learning in Arts Maebashi—from panel discussion Arts and Crafts and Moral Education

- 24 第二章 あの日、いちばん静かな海。  
FAC 2: A Scene at the Sea

- 28 寄稿 杉田 敦（美術批評）  
Contribution: Atsushi Sugita (Art critic)

- 32 第三章 未来は今  
FAC 3: The Future is Now
- 46 大切なものを展示する場所  
A place to exhibit important things

- 50 寄稿 神野真吾（千葉大学 准教授）  
Contribution: Shingo Jinno (Associate Professor of Chiba University)
- 山本高之のArts——ズレからはじめる。経験と知識から見出す  
Arts of Takayuki Yamamoto—starting from gap, sourced from experience and knowledge
- 56 制作ワークショップ・関連イベント一覧  
List of workshops & events related to the exhibition
- 62 寄稿 小泉元宏（立教大学 准教授）  
Contribution: Koizumi Motohiro (Associate Professor of Rikkyo University)

- 山本高之のArts——ズレからはじめる。経験と知識から見出す  
Arts of Takayuki Yamamoto—starting from gap, sourced from experience and knowledge
- して、作家の提案が、アーツ前橋のラーニングプログラムを振返ると  
制作ワークショップ・関連イベント一覧  
List of workshops & events related to the exhibition
- 事実とは違う経過を説明していたこと。（当時は、元担当学芸員が提出した資料が限定的であったため館内では全容把握ができず、山本氏と直接関わってきた元担当学芸員の発言と記録をもとに対応している）  
In the Era of Bright Dystopia—For the Future We Can Choose

- 実際に時系列を追って検証したところ、山本氏は前橋市側の発注指示通りに対応をしていたことが確認された。

- 3 山本氏より提出された記録集原稿について 別紙2のとおり  
山本氏より提出された原稿は、当初の記録集発行における合意内容に照らして適正なものであったことを認定します。

美術館から離れ、陸からも離れて海に出ることになる。第3章では、私が大人から子どもまでたくさんの人々と共同制作した映像や作品が並ぶ。

さまざまなやり方で行われた制作活動の準備やその過程の観察、最終的な展示鑑賞することを通して、アーツ前橋は自分たちの頭の中にある「ワークショップ」や「アート」と、今回のプロジェクトに伴う諸々の実践との差異から、考えるきっかけとなるのではないかと考えている。学びとは、その経験をした前と後では世界の見え方が変わってしまうものだ。子どもたちは日々そうした体験をしているから、学びに対してとてもオープンである。一方、大人たちはどうだろう。生きるとは、本来学び続けること、変化し続けることだ。変化を恐れる者に学びの機会は訪れない。

事務職員の方をはじめ、この美術館に関係している様々な人にこの企画の意図に共鳴していただき、その実現のためにご尽力いただいた。彼らの活躍もまた「ビヨンド20XX」のハイライトのひとつであった。この展示が、アーツ前橋の未来のみならず、どのような世界の中で生きていきたいのか、鑑賞者の方々が考え始めるきっかけとなることを望んでいる。

東京オリンピックの開催の有無とは無関係にこれからも時間は続いていく。2020年以降(beyond 2020)をどのような世界にし、どのように生きていくのかを決めるのは、私たち自身である。

2 0 1 9 年 7 月 1 9 日 山 本 高 之

**On July 16, 1988,  
'AKIRA', an animated film directed and drawn by Katsuhiro Otomo, was released.  
The film is set in Neo Tokyo, a year before the 2020 Tokyo Olympics.  
We are now living in the future we dreamt about at that time.**

**What will become of Arts Maebashi in the near future?  
What sort of society will the museum exist in?**

These are the questions that I used to start this exhibition. Thinking about the museum's learning programs is the same as thinking about our future society. Education reflects the shape of the ideal future society for adults. In this sense, thinking about education also means thinking about adults at the time. I have reached this idea as I, myself, have been involved in teaching in schools and running educational activities in various museums. As an artist, this is how I develop education as one of my themes.

So, what does 'teaching and learning art' mean?

Speaking of art and education (or art education), in most cases, many people picture activities that are almost unrelated to 'art', such as formalized workshops in which participants take souvenirs home, and presentations designed for participants to understand the intention of artists and the 'real meaning' behind their works. In fact, those activities are happening here and there. In the meantime, schools have been covering such subjects as 'art and craft' or 'visual arts', but, again, it is hard to consider those as 'art'. For children who are living constantly in a series of encounters with unknown events, the subjects studied in school are very useful to acknowledge and understand a broad range of aspects in life. However, it is impossible to recognize this complicated world with knowledge only from a single subject. Knowledge and experiences must be combined to do so; for example, "in order to understand a certain situation, the knowledge that I need is 30% history, 30% social sciences, 20% arithmetic, and 20% reading comprehension ability obtained in Japanese class," or "I could express my current feeling with the movements I learned in PE and the music I learned recently in music class". It is art that can help you develop the ability to connect the skills acquired from all the different subjects, and I believe that art is the only thing that makes this

possible. Art is continually updating our view of the world, and constantly providing us with new perspectives we have never been aware of. That is how our world expands. When we are trying a new way that we have never noticed before, we cannot judge it to be good or bad with our existing values. First of all, we will not get anywhere unless we experience it.

Now, I am presenting this unique exhibition in collaboration with Arts Maebashi. In the exhibition, in order to think about the future of Arts Maebashi and its learning programs, we assume that 'Beyond 20XX', a near-future science-fiction movie, is the collection of the whole activities that were realized or not realized inside or outside the museum. As mentioned above, if education reflects the future of the world, thinking about it equates to unleashing your science-fiction creativity in your brain. The future is built on past accumulation. Thus, I proposed that the curatorial team of Arts Maebashi should take a moment to stop and re-examine the past of the organization to which they belong in the context of their own perspectives. The first chapter, 'Beautiful harmony', is the embodiment of reflections from each of the curators. Instead of pursuing the future in a way to chase after the social trend as if to change shoes one after another, we've realized this approach in order to reaffirm that we are the ones to make an independent decision for our future direction by our own will. That means that they will re-evaluate their basic resources, such as 'collection', 'citizen' and 'curator', upon which Arts Maebashi has built. In the second chapter, the curatorial team leaves the museum and even goes off the shore. In Chapter 3, the videos and works I produced with young and old are displayed.

By understanding the disparity between the 'workshop' or 'art' in theory and various actions put in practice through this project, I believe that Arts Maebashi could offer the opportunity to start a discussion through observing the preparations and the process of their various activities, and viewing exhibitions as final outcomes of the project. Learning is something which changes the way the world looks after you experience it. Children are very open to learning because it is a daily affair for them. What about adults? To live is to learn and change constantly. No learning opportunity comes to those who are afraid of change.

Many kinds of people involved in this museum, including the administrative staff, appreciated the intention of this project and made every effort to realize it. Their performance was also one of the highlights of 'Beyond 20XX'. I hope this exhibition provides the chance for viewers to think about not only the future of Arts Maebashi but also what kind of world they want to live in.

Time goes by, regardless of whether Tokyo hosts the Olympic Games or not. It is up to us to shape the world beyond 2020, and it is up to us to decide how we will continue to live on.

1 9 . 7 . 2 0 1 9 T a k a y u k i Y a m a m o t o

B E Y O N D  
20XX





# Beautiful Harmony

FAC 1: Beautiful Harmony | 第一章 ビューティフル・ハーモニー

## 第一章

この美術館の未来のあり方を考える上で  
学芸員が重要な役割を果たす存在の一つであることに異論はあるまい。  
彼らはこれからもここで行われるさまざまな展示や活動を企画し運営していく。  
「当館はあえて担当を置かず、学芸チーム全員でラーニングについて考えていく」のであれば、  
ここらで一旦立ち止まり、皆が自らの視点でこれまでのこの美術館の歴史を振り返ってみては？  
というのがこのセクションでの私から彼らへのオーダーであった。  
さまざまな企画をここでやる意味、  
地域の人たちや前橋近郊在住のアーティストたちとの関係はこの6年でどうなっているのか？  
滞在制作はどのように運営してきた？  
サポーター・ナビゲーター制度はどうなっている？  
人員と企画の数の関係はどうなっている？  
うまくできたこと、できなかったこと、もっとこうすればよかったと今になって思うこと。  
「美術館」という組織としてではなく、  
美術と人類の未来に真剣に向き合う一人の人間として、  
個々の学芸員がそうした経験や思いをもとに考えていく。  
そうして出来上がった展示は、  
彼らの個性のみならず社会の中の美術館のあり方の現状を示すことにもなるかもしれない。  
これら一つひとつの企画／展示の総体は、  
未来に向けて進んでゆく我々の耳にアーツ前橋という楽器を使った  
「美しき調和」のとれた旋律を届けることとなるだろう。

There is no arguing the fact that curators play one of the most important roles when you consider the future of this museum. They are the ones who continue to plan and manage the museum's various exhibitions and activities. However, the museum dares not assign a specialized person to take charge, meaning all members of the curatorial team must think about its learning programs. So I suggested that each curator could stop and independently look back at the museum's history from their own perspective. This may include the aims of running various projects, the development of relationships with locals or artists living around Maebashi City in the past six years, the management of residency programs, the operation of the museum's supporter/navigator system, correlation between the number of staff and the proportion of projects, good results and bad results, as well as any thoughts about what could have done to improve. As an individual person who is serious about facing the future of art and human beings, rather than merely as a member of an organization known as 'museum', each curator contemplates those above based on their experience and thoughts. The resulting exhibits may show not only their individuality but also the current state of the museum in society. The assemblage of each project or exhibit will enable us, as we move forward to the future, to hear a 'beautiful harmony' through the musical instrument called Arts Maebashi.



TEXT: 若山満大学芸員（当時） TEXT by Mitsuhiro Wakayama (Curator, Arts Maebashi)

本展最初のセクション「ビューティフル・ハーモニー／Beautiful Harmony」では、アーツ前橋の事業を「コレクション」「地域アートプロジェクト」「市民との協働」という視点から振り返った。本セクションは、5つのパートから成り立っている。地上階のギャラリーから地下に続くプロムナード（回廊状の展示空間）に展示された各パートの内容は、アーツ前橋の学芸員5名がそれぞれ考案した。

This exhibition opened with a section entitled 'Beautiful Harmony', where the intention was to give visitors a look at Arts Maebashi's past projects from three perspectives: 'collection', 'community art projects' and 'collaboration with the citizens'. The section consisted of five parts that were staged in a corridor leading from the ground floor gallery to the basement gallery, known as the promenade. Five curators from Arts Maebashi (Museum) were each responsible for developing the content of one part.

#### FAC 1

筆者の担当パートでは、前橋市がコレクション収集事業を開始したときに収蔵された作品12点を展示した。このパートの目的は、市民が創り上げてきたコレクションのルーツを知り、その方針や価値を再確認して「未来のコレクション」について共に想像することであった。各作品のキャプションには、それぞれが収蔵に至った経緯が紹介されている。また、会場には子どもたちを演者とした寸劇の映像も展示された。子どもたちには、ある所蔵作品の来歴を想像してもらい、その内容を演劇仕立てで表現してもらった。山本高之のアイデアから生まれたこの映像は、本パートの趣意をより明確かつ親しみやすく伝える役割を果たした。

I curated one part and exhibited 12 works of art, which were acquired when Maebashi City started its art collection project. The aim of my part was to learn about the roots of the collection created by the citizens, to reconfirm its policies and values, and to imagine 'the future of the collection' together. The display caption of each piece explained how the work came to be in the collection. In addition, a video of children performing skits was shown in this part. During the filming, the children were invited to arbitrarily choose one of the works, think about how it came to be part of the museum collection, and then describe it in a theatrical manner. These video works were inspired by Takayuki Yamamoto, and presented the intention of this part in a clearer and more accessible way.





## FAC 2

五十嵐純学芸員（当時）の担当パートでは、アーティスト・白川昌生によって2011年9月に開始された「駅家ノ木馬祭」のダイジェスト映像及び関連資料が展示された。本パートでは、アーツ前橋が開館以前から取り組んできた地域アートプロジェクト（以下、地域AP）の成果が紹介されている。アーツ前橋の基幹事業の一つである地域APは、市民とアーティスト／市民と市民が協同し学び合う活動全般を指す総称である。そこにはアーティストの滞在制作、まちなかへの文化支援事業、展覧会の過程で発案されたプロジェクトやワークショップの実施など、多岐にわたる活動が含まれる。2008年の開館準備期から2019年当時まで、10年間におよぶ地域APの活動には、数多くのアーティスト、そして様々な知識や技術、思いを持った数多くの市民が携わってきたはずだ。本パートでは、そんな地域APの成果として駅家ノ木馬祭が紹介された。

Another part, organized by curator Jun Igarashi, included a video digest and related materials from the *Umayo no Mokuba* Festival (The Wooden Horse Festival of Umayo), initiated by artist Yoshio Shirakawa in September 2011. The intention of this part was to look back at the progress of the Community Art Projects (Community AP) that Museum had been working on since before its opening. Community AP is one of Museum's core projects and is a general term referring to all activities in which a citizen and an artist, or groups of citizens cooperate and learn from each other. It includes a wide range of activities, such as artist residencies, support for cultural projects carried out in the town center, and the implementation of planned projects and workshops throughout exhibitions. Spanning over a decade, starting in 2008 with the preparation for Museum's opening to this exhibition in 2019, the activities must have involved so many artists and citizens, who brought differing knowledge, skills and thoughts to the process. In order to examine one achievement of the Community AP, the documentation from the *Umayo no Mokuba* Festival was showcased here.

## FAC 3

辻瑞生学芸員の担当パートでは、当館サポーター活動の一環で行われているアーツナビゲーター事業が紹介された。アーツ前橋では、2013年から鑑賞サポーター制度を導入し、2017年から来館者の作品鑑賞を対話によってサポートするアーツナビゲーターの募集を開始した。ナビゲーターは展覧会の内容を事前に学び、会期中に開催される対話型鑑賞イベント「おしゃべりアートデイズ」でファシリテーターを務める。市民がともに学び合い、考えや思いを共有することが本事業の目的とされている。本パートでは、ナビゲーターの活動を説明するパネル展示のほか、会期中のおしゃべりアートデイズの実施によって来館者に本事業を紹介した。

Curator Mizuki Tsuji, managed the Arts Navigator Project, which was featured as part of Museum's volunteer supporter activities. In 2013, Museum introduced a supporter's programme for the first time. In 2017, they started recruiting Arts Navigators (volunteers who make works of art accessible through dialogue with Museum visitors). The Arts Navigators were expected to study exhibitions in advance and act as facilitators at the interactive viewing events, 'Oshaberi (Conversation)' Art Days, held during exhibition periods. The project aimed to help citizens learn together and share their ideas and thoughts. Here, museum visitors could get to know the project through displayed panels illustrating the activities of Arts Navigators, as well as through *Oshaberi (Conversation)* Art Days, which were held for this exhibition.

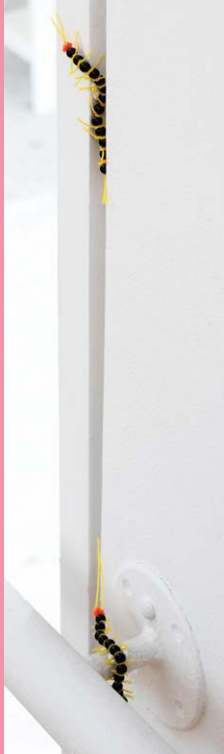




#### FAC 4

今井朋学芸員（当時）の担当パートでは、アーティスト・中島佑太と南橋団地の子どもたちによるワークショップの成果が展示された。「美術館ってなに？」と題されたこのワークショップは、アーツ前橋が2016年から継続しているプロジェクト・表現の森の一環として、2019年7月7日および7月18日に開催された。ワークショップに参加した子どもたちは5名。ワークショップの内容は、美術館の収蔵庫と展示室を見学した後、本パートに展示する当館収蔵作品1点を全員の話し合いによって決めるというものだった。多数決によって田村清男の《桃木川冬景》が選ばれたが、参加者のアイデアによって「全員がいちばん嫌いな作品」も合わせて選ばれ展示されることになった。中島のファシリテーションのもと、子どもたちは近藤嘉男の《足尾風景》を選んだ。本パートには、ワークショップの過程を記録した映像と上述の2作品が展示された。

Curator Tomo Imai's part introduced a workshop conducted by artist, Yuta Nakajima and children from Nankitsu Danchi, a local housing complex. The workshop, 'What is Museum?', was held on the 7th and 18th of July 2019 as a part of the Forest of Expression project that had been running since 2016. Five children participated in the workshop. They toured Museum's storage and exhibition rooms, and discussed the selection of one work of art to be displayed from the collection. As a result, Kiyoo Tamura's *Momonoki-gawa Toukei* (Winter Scene on Momonoki River) was chosen by majority vote. Moreover, one participant's idea led to exhibiting another work of art – the one they all disliked the most. With Nakajima's facilitation, the children chose Yoshio Kondo's *Ashio Fukei* (Landscape of Ashio). A video documentation of the workshop was screened in the space, along with the two chosen works.



し



近藤 嘉男  
（足尾風景）

KONDO Yoshio  
1940 -  
油彩 横長  
1970年代後半

#### FAC 5

吉田絵美学芸員（当時）の担当パートでは、アーツ前橋のサポーター活動を紹介する映像が展示された。普段は文字通りサポーターに徹している有志の市民は、各事業の陰の立役者でありながら、ほとんど表立って紹介されることがなかった。本パートでは、サポーター自身が日々の活動を自らの言葉で説明する映像を展示し、市民との協働の一端を紹介した。

Curator Emi Yoshida's part offered video presentations of activities by Museum's supporters. Volunteer citizens are usually committed solely to being 'supporters', and are behind-the-scenes of every project. They are rarely in the public eye. However, in the videos, the supporters are seen explaining their daily activities in their own words. This way, museum visitors could learn and see for themselves how Museum collaborates with citizens.

も



住友文彦館長（当時）以下学芸員全員と山本高之による本展の企画会議では、まず「アーツ前橋がこれまで取り組んできたラーニング活動を振り返り、これからの「美術を通じた学び」の可能性について考えたい」という当館の方針が山本に伝えられた。これに対して山本は「“振り返り”は他人にやらせてもらうことではない。自ら行うことに意味がある。これまでの活動を自分たち自身が批評的な視座から見つめ直してはどうか」という主旨の提案をした。本セクションにおける各パートの内容は、この山本の問いかけに対する各学芸員の応答であった。

At the exhibition planning meeting between then-Director Fumihiko Sumitomo, all curators and Takayuki Yamamoto, Museum first suggested to Yamamoto that they would like to look back on the learning projects that Museum had tackled so far, and consider the future possibilities for 'learning through art'. In response, Yamamoto said, "The 'look-back' process should not be done by someone outside Museum, but by the museum itself." He then addressed the curators and proposed, "Why don't you examine Museum's past activities from your critical point of view?" In response to this proposal, each of the curators started to develop a part of the section.

## BEYOND 20XX

## アーツ前橋のラーニング、向かう先はアンラーニングへ 「図工と道徳」のトークから

群馬大学  
美術教育講座  
郡司明子



この夏、決戦の火蓋は切って落とされた。2019年8月25日、展覧会「山本高之とアーツ前橋のBEYOND 20XX」において「図工と道徳」をめぐり、その未来のあり方を考えるトークイベントが行われた。山本高之の作品《ヘビとムカデのたたかい》を思わせる図工VS道徳の激しい攻防戦が繰り広げられるのか、と多くの人が固唾を呑む、緊迫感漂うアーツ前橋のスタジオ。……実際は、穏やかに、時折、笑いの渦に包まれつつ、そして雲が晴れるかのように、トークは展開していった。いずれの教科も子ども自らが意味や価値を創りだし、多様性を受けとめ合えるような社会を構成する上で有用な学びである、という共通理解に向けて。

筆者は、地域の美術教育に携わる者の一人として、アーツ前橋開館の2013年以前から、今に至るまでアーツ前橋に間近で接してきた。準備期間に開催されたシンポジウムでは、ラース・ニッティヴ氏（テート・モダン元館長）が美術館の役割を「Look again Think again」だと述べたことが、今なお鮮明に想起される。このような精神を前提としつつ、アーツ前橋は独自に「創造的であること」「みんなで共有すること」「対話的であること」の3つのコンセプトをもとに、地域に根ざし多岐にわたる文化・教育事業に取り組んできた。そして、2018年より教育普及の側面を「ラーニング」と改めることを機に、アーツ前橋の来し方をふり返り、これからの行方を見据えるべく、アーティスト山本高之氏の招聘に至ったと聞いている。

エデュケーションからラーニングへ、そして、山本高之はアーツ前橋に何をもたらしたのか？本稿では展覧会の背骨とも言うべき「図工と道徳」のトークをふり返り、そこでの「学び」を探ってみたい。

一般的に、Educationは「教育」、Learningは「学習」と捉え、前者は指導者からの伝達や導き、後者は学習者自らの学びを意味することが多い。つまり、主体は誰か？という相違であり、ラーニングを謳うことは、観覧者のみならず美術館に携わる全ての人が学びの主人公であることを示している。そして、共に学び合う関係性の構築、そのシステムづくりが「ラーニング」に求められる課題であろう。さらに「ラーニング」は、「アンラーニング＝学びほぐし」という点からも見直したい。「Unlearn アンラーン」とは凝り固まった価値観をほぐし、物事を新しく解釈することである。佐伯胖はアンラーンについて「学びほぐし＝人間の原点に立ち返ること」だと述べ、「出来事を絵のように捉え直す」ことだと

言う。[\*1]「絵的に考える」こと、すなわち、アートによる学びとはいかなることか。今回のトークイベントにて、この問いに対する筆者なりの納得「解」を得たように思う。トーク企画者である山本の紹介と共にトークの内容を見ていこう。

山本は教員としての経験を有し、学校、子ども、とりわけ美術教育に着目しながらアーティストならではの研ぎ澄まされた感覚に基づき表現活動を行っている。「教育は大人が理想とする未来の社会の形を反映したものである。」と言う山本が、新教科として成立した「道徳」と「図工」が担う学びとの拮抗に強い危機感を抱いて今回のトークが企画された。いわば、道徳の強引な「教育」化への懸念である。長く学校現場に携わる筆者にとっても、一般的な道徳の授業はその方法論からして、教員が子どもに徳目を授ける、といった印象が強い。絶対的な価値に向かって議論の余地はなく、思考停止のまま子どもが外から与えられた答え（～べき、～ねば）に自らを同化していくプロセスを目にすることが多かった。一方、図工や美術といった「アート」による「学習」は、子どもが対象／世界と交わり、実感を伴って自ら「解」（意味や価値）をつくり出すことに主軸がある。そこで、「図工と道徳」の関係性を改めて問うトークが開催されたのである。

トークに参加した専門家4名の声を聞いてみよう。前島隆宏氏（群馬県教育指導主事）からは、道徳に関する県教育委員会の方針が紹介され、「考え、議論する道徳」の授業を行うことの重要性が示された。続いて、東良雅人氏（文部科学省初等中等教育局視学官）からは、図工・美術による学びは、一人ひとり独自の価値を発信（表現）することであり、それは認め合い、尊重されるべき点において、道徳と重なることが強調された。図工と道徳をつなぐ存在ともいえる「てつがく」に取り組む小学校教諭の岡田泰孝氏（お茶の水女子大学附属小学校教諭）は、価値同士の対立がもたらす葛藤や議論を呼び起こす授業の具体例を挙げて、「当たり前を問い直す」道徳の提案を行った。最後に、教員養成学部で道徳教育を担当する久保信行氏（群馬大学）は、長年の教育現場の知見に基づき「挨拶」をテーマに、子どもや学生の記述や意見を交えながら道徳授業の実際について紹介した。

誰もが誠実に語り、会場の誰もが熱心に耳を傾け、その熱気がスタジオを包んでいた。そのなかで会場から、ささやかだけれど、テーマの真髄をつく意見が出された。道徳の授業に関して徳目の「よさ」は分かりつつも、「学校」での生き（息）づらさに触れ「ままならない時がある。」という、学校文化や社会からの圧力に対し、心の襲や機微のありように偽りなく向き合う「正直」な声。この発言の瞬間、まさに価値や思いの対立に直面した会場で、ゆらぎを察知したのは筆者だけではないだろう。徳目は常に正義という前提を問う視点である。そして、各個人の中にもその時々にも多様な側面が存在していることに気づかされる。この「ゆらぎ」かつ「問い直し」こそが、新たな「ラーニング＝学び」を誘発する源ではないだろうか。従来の既成概念にあらためて目を向け、立ち止まって考える。すなわち「Look again Think again」の状況。それは、むしろ「アンラーニング＝学びほぐし」と呼ぶのがふさわしい。

先のアンラーン「絵的に考える」ということは、佐伯によれば、全体のイメージ、配慮、関心、調和を重視することであり、問主観性＝主観と主観を交渉させることから、多元的な価値を誘発するという。[\*2] これは、人の「絵的な思考」を可視化し続けてきた美術館の機能と重なるのではないか。ここに美術館における「ラーニング」と「アンラーン」による変則的で多元的な学びの可能性が見えてくる。さらに、佐伯は周囲の状況を「絵」のように見渡すことで個々の行動の判断をすることが「ケアリング」であり、それは道徳性の根本であると説く。[\*3] ここにも、トークのテーマ「図工と道徳」両者における理念の重なりを見ることができよう。

さて、このような「学び（ほぐし）」に誘うトークや展示が開催される美術館を、東良は「大人の遊園地としての知的なエンターテインメント性を帯びた場所」とであると述べた。まさに、トークの際に私たちは、これまでの自身の思考や価値観が刷新されていくような、わくわく感の「遊び／学び：アンラーニング」のただ中にいた。それは、トーク終盤に久保が教育の未来に向けたメッセージとして「動的な可能性を探る、学び続けることの価値」に触れた点に象徴されるだろう。

かくして、山本高之がアーツ前橋にもたらしたものは何か？それは、「Look again Think again」のマインドを自己生成していくこと。すなわち、アーツ前橋（周辺の文化事業のあり方も含む）自体を問う、“学びほぐしの種”を宿してくれたのではないか。その種は、この地域で教育や文化に携わる私たちにあって、刺激的なギフトであったと受けとめている。

\*1 佐伯胖 講演「今、改めて教育とは～人間教育の視座から～」創価大学教育学講演会、2017年11月25日

\*2 前掲書

\*3 佐伯胖 講演「美術教育から〈学び〉の変革を！」青山学院大学、2007年8月10日

※登壇者の所属等は2019年当時のものである。

## Learning toward un-learning in Arts Maebashi

### from panel discussion *Arts and Crafts and Moral Education*

A k i k o G u n j i

Art Education Course, Gunma University

A battle has kicked off this summer. On the 25th of August 2019, the panel discussion on ‘*Arts and Crafts and Moral Education*’ took place as part of an events program related to the ‘Takayuki Yamamoto x Arts Maebashi Beyond 20XX’ exhibition. Many audiences were holding their breath and expecting a fierce battle between *Arts and Crafts* and *Moral Education*, as if they were watching Yamamoto’s work, ‘Battle between snake and centipede’. The studio in Arts Maebashi was filled with tension ... but once it started, it turned out to be peaceful, with the room sometimes filled with laughter. As if gradually clearing away a dark cloud, the panel developed its theme toward a mutual understanding: every school subject is useful to structure a society where children themselves could create meaning and values, and tolerate diversity.

As a person engaged in regional art education, I have been closely watching Arts Maebashi since its preparation for its opening in 2013 until now. At the pre-opening symposium, I clearly remember Lars Nittve, former Director of Tate Modern, describing the role of museums as “Look again, think again”. While taking this kind of spirit as an underlying presumption, Arts Maebashi has worked on diverse cultural and educational projects, based on its local community, under three concepts: ‘be creative’, ‘share with everyone’, and ‘open to a dialogue’. Then, in 2018, the educational aspect of its activities was renamed ‘learning’, which, I heard, resulted in inviting artist, Takayuki Yamamoto, so Arts Maebashi could trace back its history and look to the future.

From education to learning, what has Yamamoto brought to Arts Maebashi? In this essay, I would like to revisit the panel discussion, ‘*Arts and Crafts and Moral Education*’, which should be considered the backbone of the exhibition, and track down the ‘learning’ discussed in the session.

In general, ‘education’ often refers to teaching or guidance from a supervisor, and ‘learning’ refers to a learner’s volitional study. In other words, each has a different subject. When you use the term ‘learning’, it indicates that all those who are involved in the museum activities, including the audience, become central players. Here, one challenge for ‘learning’ is establishing relationships and a system for mutual learning. In addition, you could try to reassess the ‘learning’ by looking at it from another point of view – ‘unlearning: unbinding what had been learned. To ‘unlearn’ means to unravel entrenched values and give something new interpretations. Yutaka Saeki says, “to unlearn is to return to the origin of human beings”, and “to recapture your events visually, like you capture a drawing”.[\*1] What is ‘thinking visually’? In other words, what is learning through art? I believe that I have myself arrived at a satisfactory ‘answer’ to this question by attending this panel discussion. So now, in the next sections, I will describe the content of the panel, followed by the introduction of Yamamoto, who planned the event.

Yamamoto himself has experience as a teacher. He has been working on artistic activities, which are based on his canny sensibility that is unique to artists, while he pays special attention to schools, children and, most of all, art education. Yamamoto mentioned that, “education reflects the shape of the ideal future society for adults”, and organized the event because he had a serious sense of crisis, derived from the antagonism between the ‘learning’ role assumed by the newly established subjects: ‘arts and crafts’ and ‘moral education’. In other words, he had a concern that was raised by the authoritative educational systematization of ‘moral education’. To me, having been involved in school education for a long time, the methodology of general moral education gives a strong impression that a teacher educates children about a list of virtues. I often witnessed situations where children were not given an opportunity to discuss a topic against the absolute value, and assimilated themselves to prepared answers (with the idea of ‘must be’ or ‘should be’) without thinking. On the other hand, the core of ‘learning’ through ‘art’ in an arts and crafts class or a fine art class is children touching the object (world) and creating ‘answers’ (meanings or values) with genuine feeling. Therefore, the session was planned to question the relationship between *Arts and Crafts* and *Moral Education*.

Four experts participated in the session. Takahiro Maejima (a teacher supervisor from Gunma Prefecture) explained the Prefectural Board of Education’s policy on moral education, and showed the significance of a ‘moral education class with thinking and discussion’. Then, Masahito Higashira (Educational Supervising Officer, Elementary and Secondary Education Bureau, Ministry of Education, Culture, Sports and Science and Technology) emphasized that learning in an art class offers students the opportunity to express their own value, and this could overlap with the moral classes at the point where students also recognize and respect the values of others. Next, Yasutaka Okada (Ochanomizu University Elementary School teacher), who works on Tetsugaku (philosophy) which may be thought of as a connecting agent between *Arts and Crafts* and *Moral Education*, gave examples of the classroom where the confrontation of different values provoked conflict and discussion, and proposed a moral education to question our normality. Finally, based on his experience in schools, Nobuyuki Kubo (a specialist in charge of moral education courses at the Department of Teacher Training in the Faculty of Education, Gunma University), introduced the practice of moral education with children’s or students’ commentaries and opinions under the theme of ‘greeting’.



Everyone spoke sincerely and listened attentively, and the enthusiasm bubbled up in the studio space. The audience made modest but quintessential remarks on the topic. One person said that they understood the ‘good’ about virtues in moral education, yet they “sometimes things do not go as we expect” – pointing out how hard it is to survive - or to breathe, so to say - in ‘school’. This was a truly ‘honest’ voice, raised against pressures from school culture or society. This is only possible when they sincerely faced the complexities and subtleties of their minds. At the time, it can’t have just been me who sensed a change of mood in the venue, where participants were experiencing a confrontation of different values and thoughts. This was a perspective to challenge the presumption that virtue is always the right thing to do, and this also makes you aware that there are various aspects in each individual at any given time. ‘Change of mood’ and ‘questioning’ may be the source of the new ‘learning’. Take a fresh look at the existing stereotype, stop and think; in other words, this is a “Look again, think again” situation. It should be called ‘unlearning: unbinding what has been learned.

Unlearning, mentioned previously, ‘thinking visually’ means, according to Saeki, putting emphasis on an overall image, consideration, interest, and harmony, and fosters multi-dimensional values with intersubjectivity, allowing negotiation between one subjectivity and the other. This overlaps with the function of museums that have been visualizing ‘visual thinking’ for people.[\*2] Here, you could see the possibility of irregular and multi-dimensional learning brought about by ‘learning’ and ‘unlearning’ in the museum. Furthermore, Saeki explains that ‘caring’ is to judge individual actions by looking out over the surrounding situation like a ‘visual image’, and it is the foundation of morality.[\*3] Here, you could again see both ‘*Arts and Crafts* and *Moral Education*’, the panel theme, sharing their philosophies.

Higashira referred to art museums that invite audiences to the ‘(unbinding) learning’ through talks and exhibitions as “a place with a quality of intelligent entertainment as an amusement park for adults”. During the panel discussion, we were right in the midst of the excitement and ‘play/learning: unlearning’, which allowed us to reform our own thoughts and values. This may be symbolized by Kubo’s statement about “the value of exploring dynamic possibilities and continuous learning” at the end of the session as a message to the future of education.

What did Takayuki Yamamoto bring to Arts Maebashi as a result? To nurture the minds of ‘look again, think again’ by themselves, that is to say, to question Arts Maebashi (and its related cultural projects) themselves, I believe he has planted ‘seeds of unbinding learning’. I regard these seeds as a thrilling gift for those of us involved in education and culture in this region.

---

\*1&2 Yutaka Saeki, Lecture “Questioning again, what is education? -from the perspective of human education-”  
lecture at the Soka University Education Society, on November 25, 2017

\*3 Yutaka Saeki, Lecture “Reforming ‘Learning’ from Art Education” at Aoyama Gakuin University, on August 10, 2007

Speakers’ affiliations and other details are current as of 2019.



# A Scene at the Sea

FAC 2: A Scene at the Sea | 第二章 あの夏、いちばん静かな海。

## 第二章

第1章でこの美術館の過去と向き合った学芸員たちはここで大洗の海でサーフィンをすることになる。サーフィンは、遥か向こうの沖からやってくるウネリと身体的に同調して初めて成立するスポーツだ。足元がどんなに不安定だとしても、恐怖心を克服し、近くばかり見ずに顔を上げ視線は遠くへ。そうしないと波に巻かれることになる。概念としての海ではなく実際の海に入り、その力に触れる経験は彼らの意識、身体感覚をどのように変化させるのだろうか。

Here, the curators, who previously confronted the museum's past in Chapter 1, will surf in the ocean at Oarai. Surfing is a sport that is only possible when you are physically synchronized with the swells coming from afar. Even if you feel unstable, you must overcome your fear, raise your head and look into the distance, otherwise, you will get caught by the waves. How does the actual experience of entering the ocean and feeling its power, rather than just imagining it, affect the curator's consciousness and physical senses?



# A Scene at the Sea あの夏、いちばん静かな海。(2019.07.03)

Participating curators' conversation while driving to the sea  
参加学芸員の、道中車内での会話

## 行きの車 on the way to the beach

今井：小田久美子からメッセージ。サーフィン頑張ってる。

Imai: A message from Kumiko Oda, "Good luck surfing!"

若山：ははは。前橋市在住の小田久美子さんから応援メッセージいただきました

Wakayama: Ha ha ha. We got encouragement from Kumiko Oda, who lives in Maebashi City.

今井：昨日住友氏からもきたよ。みなさんきおつけてね

Imai: I also got a message from Director Sumitomo yesterday, and it says, "Take care, everyone!"

辻：住友さんも行くんだったら行きたいタイプだもんね

Tsuji: Mr. Sumitomo is the type of person who wants to go if he has to, isn't he?

若山：海なんて…なん年ぶり？

Wakayama: I haven't been to the beach for ... how many years?

吉田：最後に行ったのは？

Yoshida: When was the last time you went?

若山：海に入るのがだけどさ。中3？

Wakayama: In terms of swimming, maybe when I was in the 9th grade?

吉田：大学時代は一回も？

Yoshida: Not even once when you were a university student?

若山：行ってない。海に入ってはないですね。

Wakayama: Never. I haven't swum in the sea for such a long time.

吉田：見に行ったりはした？金沢だし

Yoshida: Didn't you even go to see the beach? You were in Kanazawa.

若山：見に行ったりはした。中三ということは15歳？14年ぶりですか。

Wakayama: I did go. The 9th grade ... that means I was 15, and this is my first time in 14 years!

吉田：はははは。

Yoshida: Ha-ha-ha-ha.

辻：砂浜と塩水嫌でしょ？

Tsuji: You don't like sandy beaches and salt water, do you?

若山：嫌だっていう感覚すらない。思い出せないレベルですよ。

Wakayama: I don't actually know if I don't like it. I can't even remember.

吉田：どんなだったけ？

Yoshida: What was it like?

若山：どんなだったけ？もう忘れちゃった。

Wakayama: What was it like? I forget.

吉田：海で波をかぶることはなかったから、最近。

Yoshida: I haven't had to swim or catch a wave in the sea recently.

吉田：ここまで浮き輪で。今日はこわいよ。

Yoshida: I've been using a floatation ring so far. It's frightening today.

若山：ひっくり返るからね。

Wakayama: We might get tipped over.

吉田：コンタクトをとるほどまで浸かることはなかった。

Yoshida: I never went in so the deep that I had to remove my contact lenses

辻：そうだよな。怖いよね。

Tsuji: Neither did I. It's scary, isn't it?

吉田：こわい。

Yoshida: Scary.

辻：飲んじゃったらしょっぱいんだよ。きつと。

Tsuji: If you drink it, it's salty. I'm sure.

堺：予想以上にしょっぱいと思う。

Sakai: I think it's saltier than you expect.

辻：わー

Tsuji: Wow.

若山：しょっぱいんだっけ？

Wakayama: Salty?

堺：あー！

Sakai: Aah!

辻・若山・吉田：わー！

Tsuji, Wakayama, Yoshida: Wow!

若山：開けましたねー、海です

Wakayama: Now we can see it all. Look at the ocean!

吉田：生える木も、海っばい木が

Yoshida: The trees growing there are adding a taste.

若山：水平線きれいですね

Wakayama: The horizon is beautiful.

吉田：感動だわ

Yoshida: Amazing!

若山：群馬在住者たちが歓喜しております

Wakayama: Gunma residents! Rejoice!

辻：こういう感動味わたったの久しぶり

Tsuji: It's been a long time since I've experienced this kind of emotion.

若山：海見てナチュラルに感動する

Wakayama: I'm simply touched by the sea.

## 波から上がった時 back on the beach

若山：疲れた

Wakayama: I'm so tired!

今井：超楽しかった～

Imai: It was super fun!

## 帰りの車 on the way home

若山：一個一個の動きがおじいちゃんみたいになってきた

Wakayama: Every single movement is making me feel like an old man.

辻：こうやってみるとすごい激しい波なさそうだけどさ。

Tsuji: It looks like there are no intense waves ...

今井：ね

Imai: Yeah.

若山：でも目の前にガッて迫ってくると、おーってなる

Wakayama: But when it comes right in front of you, you'll be amazed.

辻：次の波でいきましょうって言われて、あれあれあれって

Tsuji: I was told to catch the next wave, and I was like, "What, what, what ..."

今井：波あるっけ？って

Imai: I was like, where is the wave?

辻：あのちっちゃいやつかなって思っていると

Tsuji: You find a tiny one in the distance, and then ...

若山：そうしたらだーって迫ってくるの。案外ああああって

Wakayama: And then it came at you quickly, like 'roooooaaarrrrr!' and all of a sudden, we're like 'oh nooooo!'

吉田：後ろから来る波

Yoshida: The waves came from behind.

若山：そうそう。波後ろから来た時にスピードに乗ってないと波に置いてかれるんだよね

Wakayama: Yeah, yeah. When the wave comes from behind, if you're not at speed, the wave will leave you behind.



吉田：ああ

Yoshida: True.

若山：波の方が早いから。あれは我々が全部押してもらっていたから何とか乗れた

Wakayama: Because the waves come up quickly. However, we managed to catch a wave each time because onto them by our instructor.

辻：でももう一回くらい行きたいよね。

Tsuji: But, don't you want to have at least one more go?

若山：そうそう

Wakayama: Yeah, yeah.

高山：え！みんなすごい！

Takayama: What? You guys are amazing!

辻：もう少しコツを掴みたい。

Tsuji: I want to get the hang of it.

今井：もうちょっとのところにに行ける気がする

Imai: I feel like we can go a bit further.

高山：ああ

Takayama: I see.

辻：もうちょっと落ち着いていろいろできる気がする

Tsuji: I think I could do more things in a more relaxed manner.

若山：そうね。そうかもしれない

Wakayama: Yep, you may be right.

辻：ふふ

Tsuji: He-he.



## BEYOND 20XX

パパはサーフボードに乗ってくれない……

美術批評

杉田 敦



理性的な言説にしか身をおけない人が、必ずしも理性的であるというわけではない。本当に理性的な人ならば、おそらくきっと、エトスとパトスにとどまらず、その外側に広がっている広大な地平に対して無視を決め込むことを恥じて、おのずと謙虚な気持ちを抱くはずだ。おそらくそうすることができないまま、ロゴスというパパだけを追い求めていることがあるのだとすれば、その姿は、哀れな小心としか周囲の人間には映らないだろう。もちろんこれは、言説に限った話ではない。社会や世界には、いたるところにそうしたわかりやすい支柱に依拠しようとする、いや、依拠することだけが唯一の使命だと勘違いしてしまっているような態度を認めることができる。もちろん、自分自身もまた、そうした姿を晒してしまっているかもしれないということには常に注意を払わなければならない。けれども、決して容易なことではないはずだとしても、もしもそうした批判を遠ざけることができたとすれば、本当の意味での理性的な何ものかが手に入るという可能性も芽吹くことがあるはずだ。もっとも、社会や世界に浸潤してしまっているものを、そう簡単にリセットすることなどできるわけもない。でも例えば、必ずしも成果だけを求めることのない人間のとある実践領域で、その端緒を開くことができるということとは期待できないだろうか。そして芸術は、そもそもそうした実践領域ではなかっただろうか……。

でも、そうした実験の大半は失敗に終わることになる。決してはなから失敗しようとしているわけではないはずなのだが、それでもその多くは失敗に終わることになるだろう。だがこのとき思い出してみ必要がある。ほくたちが耽溺して、ときに無批判に受け入れながら、世界の根拠に据えているものを。そう、科学、あるいは科学的精神のことを。科学は、世界の仕組みを厳密かつ客観的だとされる方法で解き明かそうと努めてきた。異論のある人も少なくないはずだが、そうした分析のすべてを意味がないと切り捨てることは、そうした人々にとっても難しいはずだ。しかし、その科学という実践のなかで日々行われている実験の多くは失敗に終わっていることを想起してみる必要がある。仮説を裏づける結果がもたらされるようなことはそう滅多には起こらない。科学は、無数の実験の失敗によって成り立っている。科学という人間の営為は、具体的な成果に結びついた奇跡的な実験やその成果にあるのではなく、その水面下にうず高く堆積している失敗こそだというべきだろう。つまり、かの実験領域で行われることになるはずの実験も、そう滅多にうまくいくことはないはずなのだ。

無意識のうちの依拠から抜け出すための最初の一步は、既存の枠組みを疑ってみることから始められることになるだろう。社会、共同体、理性、民主主義、自由……、そして教育、そして芸術。教育にフォーカスすれば、知識、実践、経験、理解、創造性、あるいは芸術であれば、感覚、創造、共感、表現など

などということになるのだろうか。そしてもっと手前に、アーティスト、美術館、美術館を司る行政、美術館の責任者、鑑賞者などなどという文節化されたものがゴロゴロしている。例えばある実践者がこう投げかけてみたらどうだろうか。アーティストはアーティストでなく、美術館は美術館ではない。行政はそれを司ることなどでせず、責任者は裸の王様に等しく、鑑賞者は内なる生産者なのだと。与えられた枠組みから抜け出すことが怖れを伴わないわけがない。きっかけも必要だが、それ以上に勇気が必要なのだ。その勇気を擬似的に体験してみるとしたら……。

そう、例えばサーフィンをするために波のなかに漕ぎ出してみること。誰も助けてくれはしない。気がついたら波間に揉まれ、くぐもった音の世界のなかで、ああ自分はなんでこんなことをしているんだろうと悲しくなってくる。ゴボゴボ、モゴモゴ、ボコボコ……。自分には勇気なんかないし、自分自身にべったりと張り付いている種々のドクサを振り払うことなんかできるわけもない。きっと、しこたま海水を飲み込みながら惨めな想いとらわれることになるだろう。そしてそれを何度も繰り返すことになるはずだ。けれども、なかば投げやりな気持ちで幾度となく波に揉まれているうちに、そして幾度目かに、どうにか水压に逆らって水面に頭を突き出してみた瞬間に、自身のなかのささやかな変化に気づくのではないだろうか。さっきまでの後ろ向きの想いが嘘のように消散し、どこか晴々とした、そしてどこか不思議な自信というもので芽生えてきている。サーフィンが上達しているかどうかは問題ではない。波のなかにいる自分に、あらゆるドクサに縛られていない自分に、微かな誇りさえ抱き始めているはずだ。

もちろん、サーフィンに行くことをためらう人もいるだろう。それはそれで仕方がない。だってパパと一緒にサーフボードに乗ってくれるわけではないのだ。怖くて怖くて仕方がないのだ。そのことを責めてはいけない。波に揉まれた人たちは、いつかそうした彼や彼女が勇気を出してくれることを期待している。そこから自由が始まる。そしてそこから未来が始まる。

Daddy will never ride a surfboard  
with you . . . .

A t s u s h i S u g i t a

Art critic

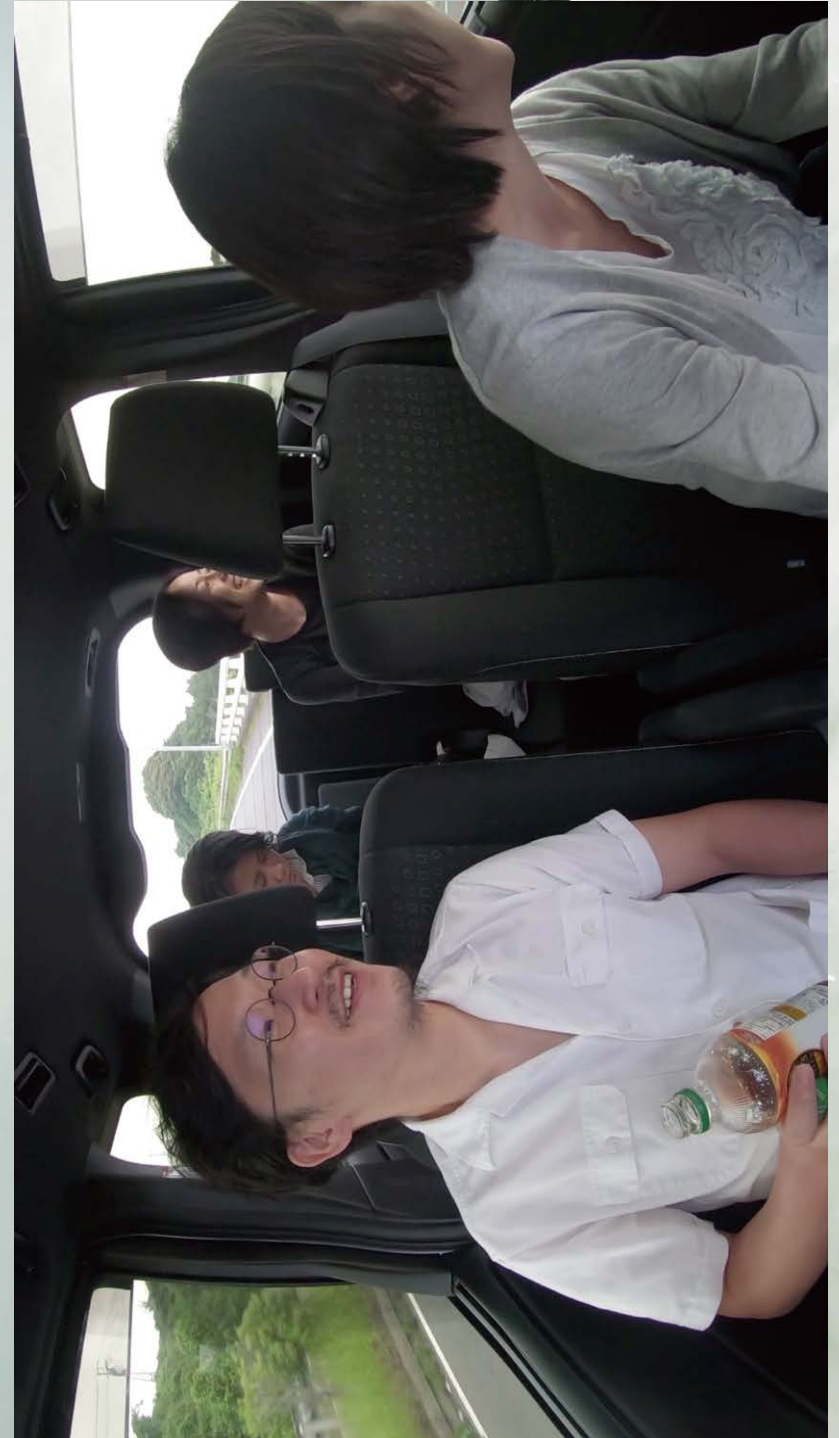
Someone who can only engage in rational discourse is not necessarily rational. A genuinely rational person would probably be ashamed to ignore not only ethos and pathos, but also vast horizons that lie outside of them, and would naturally feel humbled. If, perhaps, one is unable to do so, and only pursues Daddy called Logos, you may be regarded by others as someone with a pitiful and timid heart. As you know, this is not just limited to ‘discourse’. Everywhere in society and throughout the world, you can see people who rely on easy-to-understand props, or rather, who mistakenly believe that doing so is their only mission in life. Of course, I should always be aware of the fact that I myself may also unknowingly possess such a mindset. Even if you believe that it's not an easy task, if you can successfully avoid such criticisms of your mindset, there is a chance to obtain something that is genuinely rational. However, there is no easy way to reset something that has pervaded society or the world. But, can we expect to find a clue in a certain practice field of someone who does not always only seek results? Isn't art a practice field like that in the first place?

Most experiments based on a practice field will not be successful. There is no intention to fail, but many will end in failure. But, that is when we need to remember what it is that we indulge in, accept without criticism, and base our world on. That thing is science, or the ethos of science. Science seeks to unravel the mechanisms of the world in a rigorous and objective way. Many people may object to this notion, but it is surely difficult, even for them, to deny all scientific analysis and call it meaningless. Here, it is important for us to remind ourselves that, on a daily basis, many experiments conducted in the practice field of science have failed. They hardly produce results to prove their hypothesis. Science consists of countless experiment failures. The real nature of human activity in the name of science should lay not in a miraculous result or an experiment that led to concrete achievements, but in the failures that have piled up behind the scenes. This means that experiments that are supposed to be conducted in the practice field should rarely fall into place.

An initial step might be questioning the existing framework in order to get out of the state of unconscious reliance. Such frameworks include: society, community, rationality, democracy, freedom ... and education and art. If you focus on education, it may include knowledge, practice, experience, understanding, and creativity. In the case of art, it may be broken down to include senses, creation, empathy, expression, and so on. You will also find segments, such as artists, museums, governments that manage museums, museum directors and audiences, scattered around each framework. For example, what if one practitioner proposes a hypothesis like, "Artists are not artists, and a museum is not a museum. The government cannot manage it, its director is just like the naked king in The Emperor's New Clothes, and its audiences are core producers inside the museum"? You can not step out of a given framework without fear. The action needs to be triggered, and moreover, it needs courage. And if you try to simulate this courage...

It is, for example, like paddling out through the waves to surf. There is no one to help you. Before you know it, you are in a world where every sound is washed out by the burbling, gurgling and bubbling of the waves that engulf you. You start to feel sad, wondering why you are doing such a thing. You think to yourself that you don't have the courage; you cannot remove the various doxa that are entrenched within you, and you become caught up in your miserable feelings, all while swallowing a lot of seawater. You repeat this many times. However, after being swallowed by the waves over and over again, and you're almost feeling like giving up, you notice a subtle change within yourself, right at the moment when you try to lift your head out of the water, against the water pressure. Amazingly, the negative thoughts you had, just a moment ago, disappear, and somehow, a clear or even magical confidence starts to grow. It doesn't matter whether your surfing skills are improving or not. Even the slightest sense of pride is starting to emerge, and you are free from the constraints of any *doxa*.

Of course, some may hesitate to go surfing. That cannot be helped because Daddy will not get on the surfboard with you. It is so scary. But, never accuse anyone of not doing it. Those who have already experienced the waves hope that they will pluck up the courage someday, since they know that it is one of places where freedom begins, and where the future begins.



# THE FUTURE IS NOW

## 第三章

わたしがかんがえたみらいはこんなかんじ。

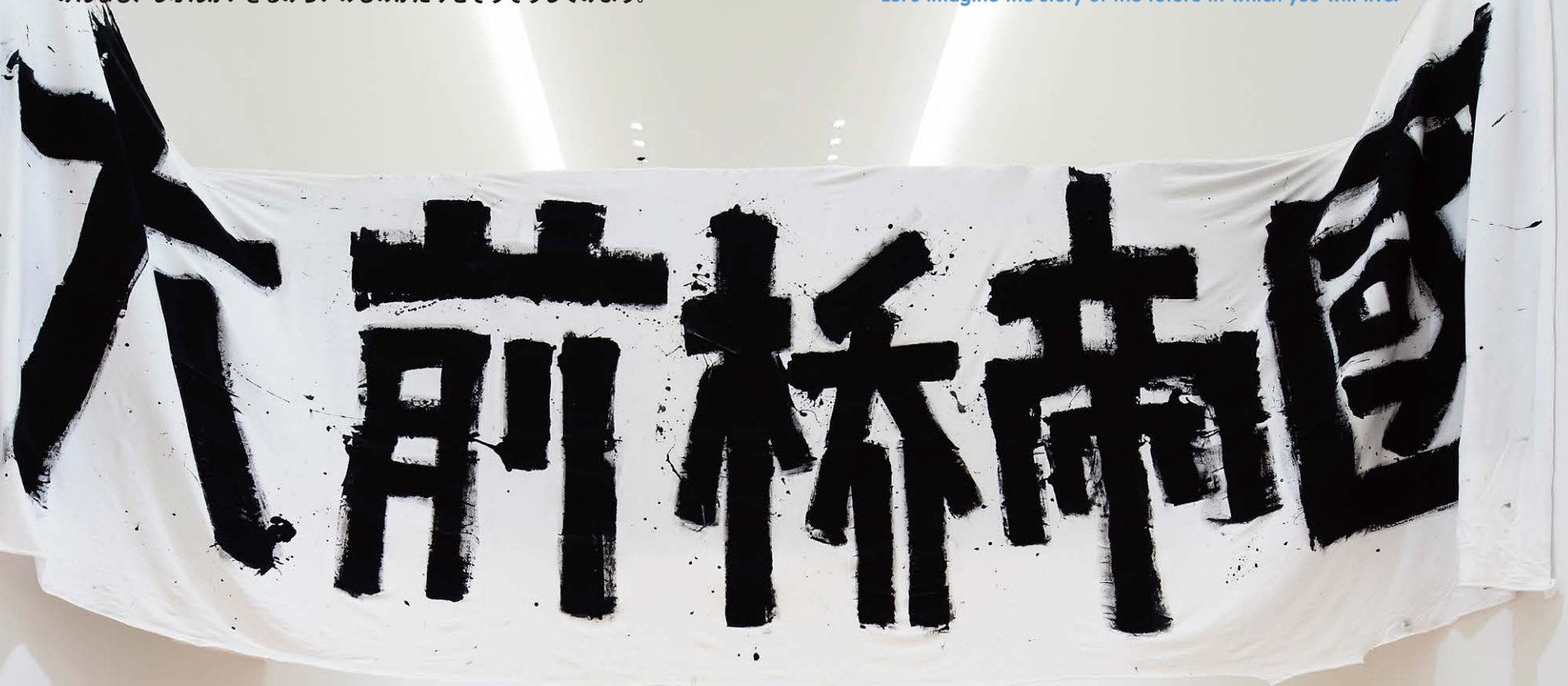
ここにてんじされているのは、ものがたりのなかのどんなシーンなのかな。

みんなも、じぶんがいきるみらいのものがたりをそうぞうしてみよう。

I imagine the future like this.

What scene in the story is exhibited here?

Let's imagine the story of the future in which you will live.



《大前橋帝国》Great Maebashi Empire, 2019

地下ギャラリー 第三章《ビヨンド2020 道徳と芸術》の一部。

「子どもたちによるレジスタンス組織“アーツ前橋”によって製作されたフラッグ（横断幕）」  
という設定のもとで制作された。

共同制作：山本千夏

Part of Chapter 3, 'Beyond 2020: Morality and Art' exhibited at the Basement Gallery.

Created as a 'banner produced by a children's resistance organization called Arts Maebashi'.

Co-production: Chiaki Yamamoto



西暦20XX年、極東の島国では震災や津波、原子力発電所のメルトダウンなどによる甚大な被害の後の混乱や、前世紀から続く慢性的な不況を与える人々の疲弊した心につけ込み、新興宗教連合体と既得権益に支えられた政権が誕生した。彼らは自分たちの教義に則って着々と社会の仕組みを変え、その「改革」の手はもちろん教育にも及んでいった。既存の仕組みに疑問を持たぬ国民を育てることは、彼らの権力の維持には欠かせないからである。2020年東京にて開催されたオリンピックと前後し、閉塞し緩慢な死に自ら向かっていく社会に対する子どもたちによるレジスタンス活動が始まる。小さな活動家たちは自らの組織のことを「アーツ」と呼び、SNSを使って急速にその支部の数を増やしていった。「アーツ」では、こんな社会を作った大人たちと対峙し、やつらのようにならないために、西洋からの輸入概念であるARTをもとに独自の教育メソッドが開発されていく。幼児期からタブレットなどの携帯端末と親しむインターネット・ネイティブたちにとって世界中のさまざまな言語や歴史、哲学、技術を習得することは容易い。それらの知識を統合する概念として彼らはARTを利用した。ARTが持つ批評的視点や他者や世界への愛と想像力が、与えられた状況と向き合い改変していく活動において、自らが持つ膨大な知識の中から最も効率的かつ効果的な行動を選択するのに役立ったのだ。各々が行動した際に得られた経験は開発された機械によって全員に共有される。また、生物の研究を通して言語を用いない対話法についても研究している。そうした活動に同調する大人たちも少しずつではあるが現れ始めた。「アーツ」の行動指針は「おはしも」という4文字に集約されている。「おはしも」は元々大人たちによって地震や火事、暴漢の学校への侵入などの重大な事態が起こった際の避難行動の心得「押さない・走らない・静かに・戻らない」の頭文字をつなげて提唱された標語である。群馬県前橋市の支部である「アーツ前橋」の地下には、かつて無名の彫刻家がこのモットーを表した石の彫刻（地震により倒壊し現存しない）の制作過程で作ったと思われる、同寸のダンボール製マケットが大切に保管されているという。

(玉座 (映画「AKIRA」より))

Throne (from the film 'AKIRA'), 2019

アーツ前橋の監視スタッフの方が座するための椅子として制作された。

共同制作：山本千愛 制作協力：アーツ前橋サポーター

Produced as a chair for security staff in Arts Maebashi.

Co-production: Chiaki Yamamoto Production cooperation: Arts Maebashi Supporters



In 20XX AD, in a Far Eastern Island country, a new government came to power with the support of an alliance of new religious groups and other groups with vested interests. The government took advantage of the chaotic state of the nation after the devastation from earthquakes, tsunamis, and the meltdown of nuclear power plants, as well as of the people who have suffered from the chronic recession that has continued since the last century. Gradually, they changed the nation's social structure in accordance with their doctrine. Without a doubt, this 'restructuring' extended to education because nurturing people who accept the existing national system is essential for a country to maintain its power. A children's resistance movement against this closed society that was slowly killing itself had begun with the momentum of the 2020 Tokyo Olympics. A group of young activists, who called themselves 'Arts', grew rapidly through the use of SNS and opened more and more branches. As Arts stood up against the adults who had made this world, and in order not to become like these adults, they developed original educational methods based on ART: a concept imported from the West. It was easy for digital natives who, as children, were familiar with using mobile devices such as tablets to learn global languages, history, philosophy, and technologies. The 'Arts' used ART as a concept to integrate their knowledge. Since critical viewpoints, imagination and love for others and the world, all inherent in ART, helped them confront and change the given situation, they found ART useful to select the most effective and efficient actions from their considerable knowledge. The experience gained from each activist's actions was shared with everyone through a newly-developed device. In addition, as part of their biology research, they were studying methods of the interchange of dialogue without the use of languages. Meanwhile, some adults slowly but surely started to agree with Arts' activities. Arts' action guideline was narrowed down to a word with only four vowels: o-ha-shi-mo. Ohashimo was an acronym for an evacuation procedure that was originally taught by adults in case of emergencies such as earthquakes, fires, and school intruders. The slogan was created by connecting the first syllable of each of four instructions: *osanai* (do not push), *hashiranai* (do not run), *shizukani* (be quiet), and *modoranai* (do not return). In the process of carving a stone sculpture (which unfortunately collapsed and was lost during an earthquake) with this acronym, the little known artist is said to have created a full-scale cardboard model that is securely stored in the basement of Arts Maebashi, one of the Arts' branches, in Maebashi City, Gunma Prefecture.





**《おはしも》 O-ha-shi-mo, 2019**

地下ギャラリー 第三章《ビヨンド2020 道徳と芸術》の一部。  
「2011年、無名の彫刻家によってつくられた石像の同寸マケット」という設定のもとで制作された。  
共同制作：山本千愛 制作協力：アーツ前橋サポーター  
Part of Chapter 3, 'Beyond 2020: Morality and Art' exhibited at the Basement Gallery.  
Created as a 'same-size model of a stone statue made by a little-known sculptor in 2011'.  
Co-production: Chikaki Yamamoto Production cooperation: Arts Maebashi Supporters

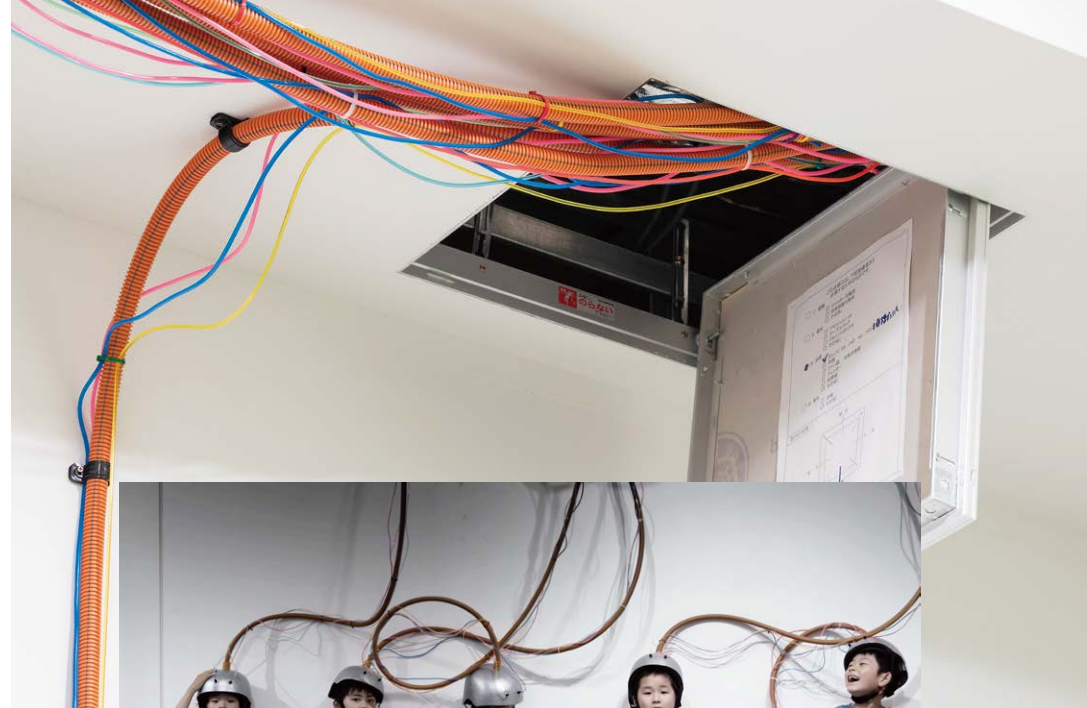




〈ヘッドギア〉 Headgear, 2019

今回アーツ前橋からの「未来のラーニングを考える」というオーダーに対し、山本高之が最初につくった作品。これは洗脳の装置なのか、それとも洗脳を解く装置なのか……座ってみると背後から機械音が聞こえてくることもある。共同制作：山本千愛

In response to Arts Maebashi's request to 'think about future learning', this was the first work created by Takayuki Yamamoto. Is it for brainwashing? Or is it for undoing brainwashing? When you sit down to try the device, you may hear mechanical sounds from behind you. Co-production: Chiaki Yamamoto



〈サーフボード(ボンザー)〉 Surfboard (Bonzer), 2019

山本高之の私物のサーフボード。1970年代にカリフォルニア南部で開発された。中央のシングルフィンに加え、サイドにボンザーフィンが2つ付いている。ターン後の加速を得ることができる特徴がある。

The personal surfboard of Takayuki Yamamoto. The 'Bonzer' was developed in southern California in the 1970s. In addition to a single fin at its center, it has two side runners: Bonzer fins. These work as thrusters, and turning gives you extra acceleration.





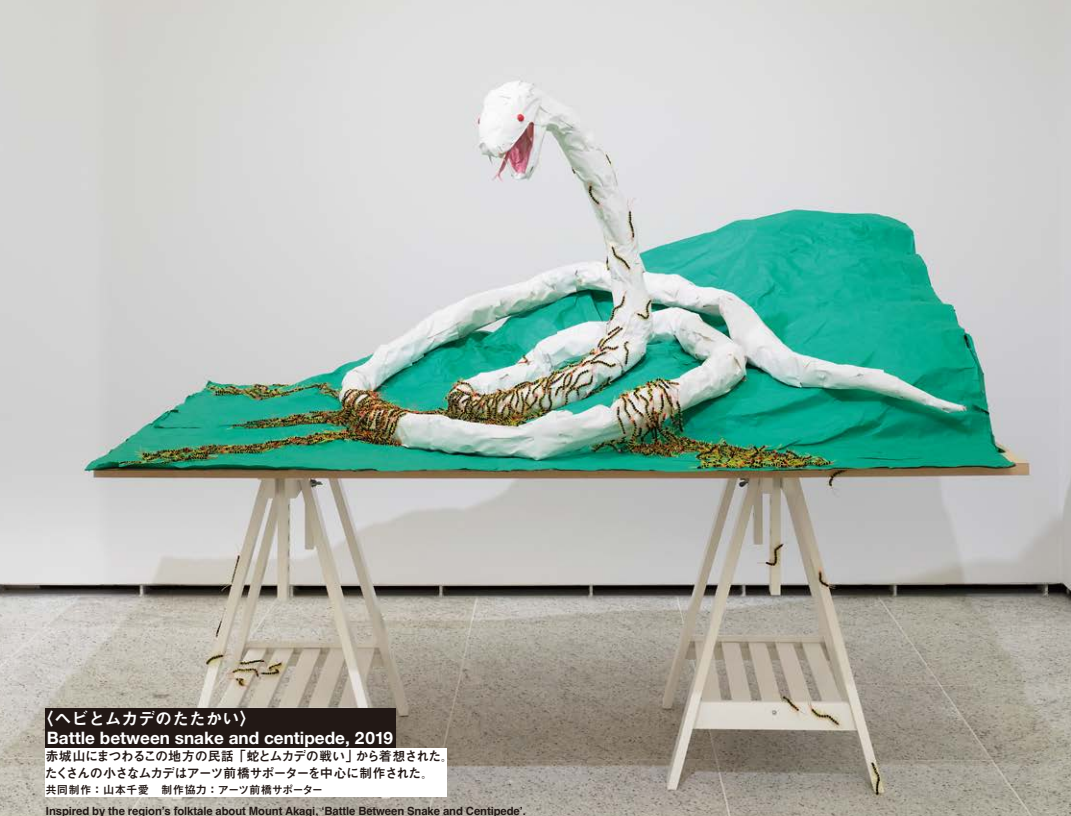


**〈ベルトコンベアー〉** Conveyor belt, 2019

「絵画作品」を共同で大量生産する装置。  
 前橋在住の小学生を対象にしたワークショップを会期前に開催し、壁面に展示されている絵はその時に制作されたもの。  
 参加者は工場のような流れ作業の中でそれぞれの役割に分かれ、一時間に100枚の絵を制作した。  
 ワークショップ時の参加者の動きは、ダンスや演劇のようにも見えた。

A device for the mass production of 'paintings'. It is operated with the help of workshop participants.  
 A workshop for Maebashi-based primary school children was held prior to the exhibition.  
 The paintings displayed on the walls were produced at that time.  
 Participants were divided into different roles in a factory-like workflow and produced 100 paintings in one hour.  
 The participants' movements during the workshop looked like dance or theatre.





〈ヘビとムカデのたたかい〉  
**Battle between snake and centipede, 2019**  
 赤城山にまつわるこの地方の民話「蛇とムカデの戦い」から着想された。  
 たくさんのお小さなムカデはアーツ前橋サポーターを中心に制作された。  
 共同制作：山本千愛 制作協力：アーツ前橋サポーター

Inspired by the region's folktale about Mount Akagi, 'Battle Between Snake and Centipede'.  
 All the small centipedes were created mainly by Arts Maebashi Supporters.  
 Co-production: Chiaki Yamamoto Production cooperation: Arts Maebashi Supporters



### 〈ムカデサーフ〉 Centipede Surfboard, 2019

民話「蛇とムカデの戦い」に登場する巨大ムカデの姿を「難解なアート」に例え、それを乗りこなすことの喜びを表現している。

共同制作：山本千愛

The giant centipede that appears in the folktale, 'Battle Between Snake and Centipede', is used as a metaphor of 'abstruse art'.

The work expresses the joy of managing to 'ride on the centipede' (ride on abstruse art).  
 Co-production: Chiaki Yamamoto



### 〈3歳児までのヌードデッサン〉 **Nude drawing for 3-year-olds, 2019**

ドイツの学校でも取り入れられている、3歳児を対象としたヌードデッサンを清心幼稚園（前橋市内）と共同でおこなった。

制作協力：学校法人清心学園 清心幼稚園

A teaching method, Nude drawing for three-year-olds, used in German schools, was conducted in the classroom, in collaboration with Seishin Kindergarten in Maebashi City.  
 Cooperation: Seishin Kindergarten



山本高之  
 @Takayuki\_Yamamoto

ムカデサーフ中



78.6万回視聴

22:27 · 2019/06/20

1.2万件のリツイート 573件の引用

3.3万件のいいね 632件のブックマーク





# SILENT



# COMEDY



## 〈サイレントコメディ〉 Silent comedy, 2019

前橋に在住する子どもから大人、外国籍の方までさまざまな背景の人々が参加し、一人ひとりが人生で一番面白かった出来事をその場にいる全員と共有。その後、劇場にて発表会をおこなった。

発表会ではそれぞれが自分のエピソードを声を発さずに発表した。

People who live in Maebashi and are of various backgrounds, different ages and nationalities, participated in this work. Each participant shared the story of the funniest event in their life, followed by a theatrical presentation in which each person performed without uttering a sound.





〈大切なものを展示する場所〉 A place to exhibit important things, 2019

前橋市在住の子どもたちが、自分の所有物の中で一番大切なものを持参し、美術館の展示ケースに入れ展示した。  
Children living in Maebashi brought their most precious possessions and exhibited them in display cases at the museum.



澤口悠吾  
恐竜

Yugo Sawaguchi  
Dinosaur



澤口瑛美  
貝がら

Ena Sawaguchi  
Shell



吉原颯汰  
ビルド

Sota Yoshitani  
Build



堺 菜穂  
星のペンダント

Naho Sakai  
Star pendant



新井佑佳  
大切なじんべいざめ

Yuka Arai  
My precious whale shark



新井龍平  
トリケラトプス

Ryhei Arai  
Triceratops



古島太陽  
ナマケモノ

Tayo Iwashima  
Sloth



岡田しほり  
レोकくん

Ryhei Arai  
Leo-Kun



後藤 玄  
仮面ライダーゴースト

Gen Goto  
Kamen Rider Ghost



喜多村晴典  
雪の結晶

Hareki Kikumura  
Snowflake



新保爽太郎  
DD51

Sauro Shimbo  
DD51



高橋楓梧  
クロちゃん

Fugo Takahashi  
Kuro-Chan



木村小百合  
ガラスの靴

Sayuri Kimura Glass Slipper



大崎愛菜  
大切な指輪

Aina Oshima Precious Ring



石田倫太郎  
ヨッシー

Rintaro Ishida Yossy



北條貴仁  
トーマスのみどり

Takafito Higo Thomas' green



大澤 進  
望遠鏡

Ren Osawa Telescope



三原理輝  
超大型解体専用機

Rika Mihara Specialized machine for super-large demolition



久保菜央  
アラーム

Naoko Kubo Alarm



高橋茉莉恵  
手乗りモンキー

Marie Takahashi Palm sized toy monkey



小西慈菜  
オルゴール

Ena Konishi Music Box



岡田すみれ  
ばあちゃんにもらった箱

Sumire Okada Box given to me by my grandmother



宮崎 葵  
とけい

Aoi Miyazaki Watch



宮崎 楓  
チビマロ

Aina Oshima Chibi-Marro



## BEYOND 20XX

## 山本高之のArts

ズレからはじめる、経験と知識から見出す

千葉大学  
准教授  
神野真吾

彼女はギリシャからやってきた。とても知識欲の強い娘  
セントマーチンズカレッジで彫刻を勉強してて

そこで僕は彼女の目にとまった

「私のパパはお金持ちなの」と彼女は言った

「そういう場合、僕はラム&コークを飲むかな」

「うん、いいわね」と彼女は言って

そして30秒の間に彼女はこう言った

私は普通の人みたいに暮らしたいの

私は普通の人がすることをしたいの

私は普通の人と寝たいの あなみたいなの

Pulp, "Common People", 1995

山本高之と話をしている時、90年代英国のブリット・ポップを代表するバンドPulpの“Common People”という曲を思い出したことがある。確か、彼がチェルシー・カレッジ・オブ・アーツを修了した頃、この歌詞みたいな状況のあった中において、母親からの一本の電話で日本の小学校の教員をすることになり、愛知に戻ったという話を聞いた時だと思う。この話から始めたのは、欧米のArtsと日本の美術[\*1]の間にあるずれへの彼の自覚が、このエピソードに色濃く表れていると思うからだ。そしてその乖離、ずれこそが彼の表現活動の出発点にあると私は考えている。

日本の美術は、明治以降、その教師役を東洋から欧米へと変え、常に欧米を参照する形で展開されてきた。その展開が根拠の薄い、本質を欠いた実践として、流行のように消費され展開されてきたと自虐的に見ることも無理のないことだと思う。そうした中で日本の美術の専門家（作り手にせよ企画者、研究者にせよ）の採る立場は、大きく分けて三つに分けられるのではないだろうか。

一つ目は、ある時点で輸入された思想や技法、様式などを一つの型として維持し、その再生産を志向する振る舞い。これは公募団体やその影響を強く受けてきた美術教育業界が当てはまるだろう。この立場がもたらす数多の課題の内では最大のものは、「新たな創造」という欧米のArtsの最大の価値がほとんど

期待できないということに尽きる[\*2]。美術教育の世界での弊害は、その最大のものだと言える[\*3]。二つ目の立場は、自分が学んだアカデミックな（最新の）理解を武器、あるいは金科玉条として、日本の美術業界の中で発言力を持つとうとする立場だ。アカデミックな知識やそこで承認されてきた歴史を踏まえた言説にはとても説得力があり、公的な組織、特に美術館では重要視されてきた。フォーマリスティックな制作志向とか、美術史を根拠とした学芸員による展示企画などがそれにあたる。文脈が意味を与えるという20世紀以降のArtsの流れからすれば至極まっとうな立場だと言えるが、極東の独特の文化や歴史を有するこの国で、それを原理主義的に遂行しようとするのが、どれだけ有効で、それが何に貢献するのかは、実はそれほど自明なことではない[\*4]。

三つ目の立場は、社会的文脈が作品に意味を与えるという点では二つめの立場の変化形と言うべきかもしれない。1960年代にArtsが社会に関わろうとする動向以降の、他領域の実践や理論を援用しながら制作、あるいは批評およびキュレーションを行おうとする立場だ。これは今も続いており、ソーシャリィ・エンゲージド・アートが生まれるなど、以前にも増して、その傾向は強まっている。この立場の現代における課題は、最新の社会理論や社会実践をいち早く参照し、新しさや目線の「正しさ」を競う新しい「輸入競争」に成りかねないことだと思う。その結果、当事者や、すでに深くその問題に関わってきた専門家たちからすれば、その理解が浅薄で、社会的課題の文脈に沿う形で作品制作やキュレーションをしているつもりでも、結局は国内限定の、個人の範囲に留まる知識や経験の視野からのものでしかなく、既存の領域にとって危険で迷惑なものにさえなりかねない。あいちトリエンナーレでは「Jアート」という語が主にネット上のやりとりで使用されたが、その背景にはこの問題がある[\*5]。ただし、そうした課題はあるものの、美術の社会的価値を考える上で、この第三の立場における方法を深化することはきわめて重要で、かつ喫緊の課題であるのも事実だ。

さて今回の展示「山本高之とアーツ前橋のBEYOND20XX」をどう見るべきなのか。先述した第三の立場を意味のあるものにする条件の一つに、その社会的文脈を当事者として自ら経験し、独自の視点を持っていることが挙げられる。ご存じの通り、山本は教育をテーマとすることが多い。山本はイギリスの芸術大学で学ぶ前に、教員養成を目的とする愛知教育大を卒業し、意に沿わなかった？とは言え、日本に戻り小学校の教員を5年間務めたことは、彼の作品にとってきわめて重要な意味をもっている。そこで経験された学校や教育制度の馬鹿げた（けれども興味深い）仕組み、子どもたちの、あるいは大人たちの滑稽さ（魅力にも変じうるが）は、一般的な学校についての言説では語られない。一方で、Artsと美術のズレを自覚し、その上で自分の現場での経験を別の角度から描き出し、そこに新たな意味の可能性を付加することが山本のやってきたことだと私は考える。

もちろん、全てのアーティストが何かの当事者でなければならないと言うつもりはない。また、当事者であれば作品化できるというわけでもない。それと釣り合うものとして深いリサーチ活動が考えられるし、当事者であっても批判的視点で、その経験を捉えることの出来ない者もいる。もちろん山本も、自身が当事者ではないものを主題とする場合もある。その際には徹底的にリサーチをし、インタビューなどを用いながらも、その重点は社会科学の客観的な記述ではなく、作家の関心にあえて“偏って”置かれることで、アートでしか可視化できない作品固有の視点が実現されるのだ。

紙幅の関係上、個々の作品について、これらの観点から詳細に言及することは叶わないが、美術館のコレクションについて言及した《この絵はなんでここにがある？》、学芸員にサーフィンで“経験”させる映像《あの夏、いちばん静かな海。》、流れ作業で抽象画を生み出す《ベルトコンベア》などを、こうした視点から再度考えてみるなら、作品の別の意味が見えてくるだろう。作品の表層だけを見るならば、可笑しい、馬鹿馬鹿しいといった印象を与える作品に、二層目まで踏み込んで見ることで、全く別の意味を読み取ることができるはずだ。それは美術のみの狭い視野からは、あるいは社会に対する浅薄な知識・視点からではまったく見えてこないもの。それを踏まえていない者は、制作者であれ、企画者であれ、表層的な美術を延々と再生産するだけにとどまらざるを得ない。本展はそこに言及している。

冒頭のPulpの歌詞では、ヨーロッパのArtsがハイクラスとかハイカルチャーに関わるもので、普通の人であるジャーヴィス・コッカー自身の感じた違和感がユーモラスに表現されている。山本は日本の教育大学で先述の第一の立場を自覚し、失望し、渡英した。本場で第二の立場を学び、それと日本とのずれを濃密に自覚する。つまり山本が私にした話は、「極東の国、日本」の美術／アートとの落差、距離が色濃く反映された感慨だったのだと思う。そこに山本の出発点がある。だからこそ、山本は自らの出自を重要視し、そこからArtsと美術のずれを自分なりの仕方で作品化し、私たちに突きつける。第三の立場、現実をどう引き受け表現に結実するかを、表層のレベルではなく扱っている数少ない日本人アーティストの一人だと私は考えている。

\*1 美術という語は、Artsの翻訳語として明治時代に作られた言葉。

\*2 海外の最新の動向を日本国内で紹介する形で始まった団体が100年経ってなお存在しているという例は日本では少なくない。それを日本固有の文化と呼ぶことも可能だが、こと「創造性」ということに拘るなら、型としての様式の継承でしかない。

\*3 教育学部、教育大学は歴史的に高等師範、師範学校の流れを汲み、公募団体系の教員が実技制作の指導を担ってきた。「よい絵」を描く教科と広く理解されてしまっているが、「よい」の内実が指導者の趣味（taste）に過ぎず、その主観的根拠が公募展への出品、およびそこの評価であった。これが日本の普通教育に与えた影響は少なくない。

\*4 欧米のArts並に日本の美術／アートが扱われていないことを嘆く美術／アート業界人は少なくない。しかし、それが実現されることが自明の事だと言える根拠を我々は歴史的に有していない。様々な展覧会の、その一般的な価値についてきちんと説明できる美術館学芸員はどれほどいるのだろうか。

\*5 「Jアート」には特に定まった定義があるわけではない。あいちトリエンナーレでの「表現の不自由展」に向けられた脅迫や苦情などへの対応を巡って、アーティスト側から対話の必要性や、その可能性が強調され、そうした取り組みが実施された。しかし、朝鮮半島出身者に向けられたヘイトスピーチに長く取り組んできた人々などからすると、差別主義者たちと対等の立場で対話すること自体が、それまでのカウンターの活動を否定するものにもなりかねない。そうしたある問題への深い理解のない、国際感覚を欠いた幼児性を揶揄して「J」を付した名称が付されたと言える。こうした態度は、日本の美術が18世紀末のロマン主義思想を素朴に信奉してきたことに一つの要因があると考えられる。日本では、心の命じるままに何かを生み出すことこそが純粋なアートであるという意識が強く、社会志向のアートと齟齬を来すことが少なくない。



## Arts of Takayuki Yamamoto

starting from gap, sourced from experience and knowledge

S h i n g o J i n n o

Associate Professor of Chiba University

She came from Greece, she had a thirst for knowledge  
She studied sculpture at Saint Martin's College  
That's where I caught her eye  
She told me that her dad was loaded  
I said, "In that case, I'll have rum and Coca-Cola"  
She said, "Fine"  
And then in thirty seconds time, she said,  
"I wanna live like common people  
I wanna do whatever common people do  
I wanna sleep with common people like you"

*Pulp, "Common People", 1995*

Once, when I was talking with Takayuki Yamamoto, a song called “Common People” by Pulp, a band representing Britpop in the 90s, came to mind. As far as I remember, that was the time when he completed Chelsea College of Arts and was in a similar situation to those written about in the song’s lyrics. He told me that one phone call from his mother made him decide to return to Aichi, Japan, to work as a primary school teacher. I wanted to open this essay with this anecdote because it fully explains Yamamoto’s awareness of the gap between Western *Arts* and Japanese Bijutsu[\*1] and I believe that this gap is the starting point of his artistic activities.

After the Meiji period, Japanese Bijutsu replaced its Eastern teaching principles with Western ones and was then developed in such a way that it always refers to the West. I think it is understandable that we might view this development, in a self-reproaching way, as weak practice without any foundation or essence that has been consumed and built up like a fad or a trend. Under such circumstances, I think that the positions taken by Japanese Bijutsu specialists – artists, creators, or researchers – roughly fall into three categories.

The first is an action in which they maintain the thoughts, techniques, and styles imported, at a certain point in time, as one prototype, and then try to reproduce them. *Koubo-dantai* (conventional artist groups and associations) and art education institutions that have been heavily influenced by those associations are categorized here. Among many problems brought by this position, unquestionably the biggest one is that you can hardly expect it to have ‘new creation’ – the greatest value that Western Arts can have.[\*2] You could say that this is the worst evil in the field of art education.[\*3]

The second position is to try to have a voice in the field of Japanese Bijutsu through using newly-obtained academic comprehension as a weapon or as an infallible rule. The discourse based on academic knowledge and academically-approved histories are very persuasive, and have been regarded as important in public institutions, especially museums. The formalistic



orientation of production or exhibition plans by curators, based on art history, are the results of this position. Taking into account the flow of *Arts* after the 20th century, where the context of the history always gives meaning, it can be said that it is a perfectly appropriate positioning. However, in this country with its unique Far Eastern culture and history, it is actually questionable whether doing things like this in a fundamentalistic way is effective or not, and what it contributes.[\*4]

The third position should be referred to as a variation of the second one, in that a social context gives meaning to art works. This position emerged after the *Arts*' movement toward social involvement in the 1960s. Here, you aim to produce a work, provide a critique, or curate an exhibit with your activities reinforced by the practices and theories of other fields. As you can see from the emergence of socially engaged art, this position has been popular until now, and its growing trend is becoming even stronger than before. From my point of view, one problem arising in the present day is that it could create a new 'import competition' in which people try to reach the latest social theories and practices as fast as possible, and compete on newness or the 'correctness' of perspective. As a result, even if you produce works or curate in accordance with the context of social issues, the position looks shallow from a standpoint of related parties or experts who sincerely deal with a particular issue for a long time. It also could end up with a narrow perspective, gained only from knowledge and experience limited to domestic or personal domains, and it could even threaten and annoy existing sectors that are related to the issue. You could observe this problem in the case of Aichi Triennale 2019; the word 'J Art' was used often in online platforms for communication during the exhibition.[\*5] Despite these kinds of challenges, it is extremely important for us to improve the approach methods of this third position when we consider the social value of Bijutsu. In fact, this needs to be attended to urgently.

How should the exhibition, *Takayuki Yamamoto x Arts Maebashi BEYOND 20XX*, be evaluated? One of the requirements for making the third position meaningful is that you need practical experience of the social context of an issue as a player, and also need to have a unique point of view. As you know, Yamamoto often focuses on education in his works. Prior to finishing art college in England, Yamamoto graduated from Aichi University of Education, an institution specializing in teacher training. Even if he was unwilling to do so, the fact that he came back to Japan and worked as a primary school teacher for five years gives an extremely important essence to his work. The ridiculous, but interesting, structure of the school and education system, and the comical (and sometimes charming) nature of children or adults are never described in general discourse about schools. Yamamoto, on the other hand, has been aware of the gap between *Arts* and Bijutsu. He has expressed his experiences from a different angle and allowed his expression the possibility of having new meanings.

Of course, I'm not saying that every artist must be a player in the context, nor that the players could always be artists. Such is the case with doing profound research; not all the players can capture the experience from a critical perspective. Needless to say, Yamamoto sometimes chooses a subject of which he is not a central player. In such cases, he conducts thorough research and uses interview techniques. Then, by deliberately emphasizing his biased interests as an artist, rather objective descriptions of social sciences, he provides a perspective that is peculiar to an art

work and can be visualized only in the form of art.

Due to the limited space, I am unable to explain each work in detail, but when you understand Yamamoto's unique point of view and revisit his works, such as *Why is this Painting here?* (a work about the museum collection), *A Scene at the sea* (a video in which curators try to 'experience' surfing), and *Conveyor Belt* (in which abstract images are produced in an assembly line), you will notice overlooked meanings of each piece. I am sure you will gain totally different meanings by stepping into the inner layer of the work, which may have given you a funny or foolish impression at first, after looking only at the surface. The deeper layer cannot be seen from a narrow perspective that is derived only from art/fine art, or from the superficial knowledge or perspective of society. Whether artists or curators, those who do not understand this logic have no choice but to keep on reproducing superficial works. This is what the exhibition pointed out.

In Pulp's lyrics, it says that *Arts* in Europe correlates to high-class and high-culture, and it expresses the uneasiness felt by Jarvis Cocker, as one common person, in a humorous way. At the teacher training college in Japan, Yamamoto became aware of the first position mentioned earlier. He was disappointed, and flew to the UK. Yamamoto learned the second position at the home of *Arts*, and recognized the gap with Japan. This means the story Yamamoto shared with me involves a deep emotion, reflecting the difference and distance clearly with the Bijutsu of 'a Far Eastern Country, Japan,' and I believe that this is the starting point of his artistic journey. That's why Yamamoto attaches importance to his roots, visualizes the gap between *Arts* and Bijutsu in his own way, and lets us confront it. Therefore, I regard him as one of the few Japanese artists who handle the third position, not on a surface level but on a deeper level, with an understanding of how to take in the reality and connect it to his expression.

---

\*1 A Japanese word meaning arts. A term coined in the Meiji era.

\*2 It is not a rare case in Japan that one group or association, that was established to introduce the latest trends from overseas, has continued to exist for a century. You could call it a unique characteristic of Japanese culture. However, if you stick to talking about 'creativity', those groups have been only handing down their patterns or styles as fixed formats.

\*3 The education faculty in universities and the universities of education are historically derived from the (Senior) School of Teacher Training, and, there, teachers related to Koubo-dantai (conventional artists' associations) have been in charge of teaching practical skills in art education. Teaching 'good' drawing skills is widely understood to be a subject, but, in fact, the quality of 'good' depends on only the teacher's taste. The subjective tastes were based on the entry and evaluation of work at open call exhibitions hosted by Koubo-dantai. This has made a considerable impact on popular education in Japan.

\*4 Many people who work in the field of Bijutsu lament the unsatisfactory treatment of Japanese Bijutsu in comparison with Western Arts. But, historically, there are no sufficient grounds for proving that it should be treated the same as Western Arts. How many curators can fully explain the general value of various exhibitions?

\*5 'J Art' seems not to have a specific definition. In response to threats and complaints against the After 'Freedom of Expression?' (one of the exhibits in the Aichi Triennale 2019), artists initiated setting up J Art Call Center in order to address the need for dialogue and its potential. However, from the viewpoint of those who have long worked on hate speech targeted at people from the Korean peninsula and others, interacting with discriminators on an equal level could deny their counter-activities. It can be said that naming the ward 'J' is treating their immaturity with ridicule because of their lack of deep understanding about those issues and that of international sense. This attitude stems from the fact that Japanese art has been faithfully committed to the romanticism of the late 18th century. In Japan, there is a strong tendency to believe that creating something exactly as the heart demands is the pure form of art, and this sometimes results in a clash with socially oriented arts.

山本は本展にあたり前橋に滞在し、新作《ビヨント2020 道徳と芸術》を制作した。本作は「ラーニング（相互的な学び）」についてアーツ前橋との議論を踏まえたアイデアに基づき、展示会の会期に向け「教育制度を考える近未来SF映画」をテーマに前橋在住の子どもから大人まで対象となる市民と協働した。また、本展のコンセプト「ラーニング（相互的な学び）」の観点から会期中には、参加を通じて「新たな学びのかたち」を体感する関連イベントが発案された。

制作ワークショップ一覧

工場のようなベルトコンベアの上でみんなでたくさんのアート作品をつくらう

“子ども向けの造形ワークショップ”のあり方を再考し、工場のような流れ作業の中でそれぞれの役割に分かれて「絵画作品」を大量生産する装置によって、参加者が協働して絵を描くワークショップを行った。参加者は導入の15分を含め、一時間で100枚の絵を完成させた。当日参加した子どもたちには、自分が一番大切にしているものを持参してもらい、たくさん作った絵との対比として、展示会において美術館の展示ケースに入れて展示した。

日時：2019年6月16日（日）11:00～12:00 / 14:00～15:00 / 15:00～16:00 ＊各回10名  
場所：アーツ前橋 スタジオ  
対象：小学生

市議会議員の肖像画を描いてみよう

さまざまな職種の中で子どもには想像しにくい「市議会議員」の肖像画を描くワークショップを実施した。前橋市の今の暮らしの大切なことを決めているのはどんな人か、市議会議員の顔写真をよく見て描き、その後、子どもたちのアジトをイメージしたセットの中で、自分たちが描いた絵の市議会議員の名前を声に出して読み上げるシーンを撮影した。当日参加した子どもたちには、自分たちが描き名前を読み上げた人々がどんな仕事をしている人たちなのか、家に帰って保護者と話し合うことも含め考えてもらう機会を促した。

日時：2019年6月23日（日）10:00～15:00  
場所：アーツ前橋 スタジオ  
対象：小学生

3歳児までのヌードデッサン

ドイツの学校でも取り入れられている、3歳児を対象としたヌードデッサンを清心幼稚園（前橋市内）と共同でおこなった。音楽では英才教育として幼いころから技術教育が行われることも珍しくないが、美術における英才教育とは、ものをよく見て形を捉える、デッサン教育が匹敵するのではないだろうか。当日子どもたちは、ポーズジグするプロの美術モデルの前に「なにしてるの?」「動かないよ」など、普段の状況との違いを感じ取り、美術教育のしつらえの中で初めてイーゼルに向かって絵を描いた。その経験による子どもたちの変化は、いつもよりも多くの時間をかけて絵を描く姿に現れた。

日時：2019年6月25日（火）10:00～12:00  
場所：清心幼稚園 オール  
対象：清心幼稚園と3歳児のクラス  
協力：学校法人清心学園 清心幼稚園

ベルトコンベアの上でみんなでたくさんつくったアート作品に値段をつけよう

「ベルトコンベア」のワークショップ参加者のうち希望する子どもたちと一緒に、みんなでたくさんつくった作品に値段をつけアーツ前橋内ミュージアムショップ「mina」でオークション形式での販売を実施した。作品の値段はどのように決まるのか、アート作品の販売を仕事にするギャラリストに話を聞きに行き、当日参加した子どもは模擬オークションも体験した。絵の値段は、この日にみんなで決めた最低落札価格「100円」として、オークションを実施した。

日時：2019年6月30日（日）14:00～15:00  
場所：画廊すいらん  
対象：「ベルトコンベア」ワークショップ参加者のうち希望者  
協力：株式会社すいらん  
＊オークションは9月4日～9月17日に実施。作品の売上は前橋市でひとり親家庭を支援する団体へ全額寄付された

みんなの「おもしろい話」を共有する

年齢や性別、出身地を問わず、前橋に在住する子どもから大人、外国籍の方までさまざまな背景の人が参加し、一人ひとりが人生で一番面白かった出来事をその場に全員と共有するワークショップを行った。その後劇場にて、舞台上で行われるスタンダップコメディの要領で舞台上上がり、それぞれが自分のエピソードを、声に出さずに発表した。声を発せずに再現される面白い話に、事前に内容を共有している参加者は、その話を思い出しながら自然と笑いがこみ上げ、ステージ上で発表する参加者に対し大きな拍手で各自のパフォーマンスをねぎらった。映像作品となった時、それはまるで「テレパシー」の交信のようにも見え、実際にそこで行われたことは想像力によってのみ可能となるコミュニケーションが取り交わされていた。

日時：2019年7月6日（土）11:00～16:00  
場所：前橋シネマハウス シアター 0  
対象：子どもから大人まで  
協力：前橋シネマハウス



Takayuki Yamamoto stayed in Maebashi for the exhibition and produced a new work, *Beyond 2020: Morality and Art*. Looking ahead to the exhibition, he discussed with Arts Maebashi about ‘(mutual) learning’. Based on the ideas developed through the discussions, he set a theme, ‘a near-future sci-fi film to think about the education system’, and collaborated with citizens of Maebashi, from children to adults. In addition, related events were organized from the perspective of the exhibition’s concept, ‘(mutual) learning’, for people to experience a ‘new form of learning’ during the exhibition period.

List of workshops

Mass-produce artworks on a factory-like conveyor belt

In order to rethink the nature of an ‘art workshop for children’, participants worked together to mass-produce ‘paintings’ through a systematic installation. They split into different production stages to simulate a factory-like flow. In the end, the participants completed 100 paintings in one hour, which included a 15-minute introduction. The participating children were asked to bring their most precious possessions, which were exhibited in the museum’s display case as contrasts to the mass-produced paintings.

Date and time: Sunday, 16 June 2019, 11:00-12:00 / 14:00-15:00 / 15:00-16:00  
\*10 participants per session  
Venue: Arts Maebashi Studio Target group: Primary school students

Draw a portrait of a city councillor

Children drew portraits of ‘city councillors’ – a position that is difficult for children to imagine among the various occupations in their society. What does the person who is making decisions on the city’s important issues, relevant to their everyday lives, look like? The children were asked to take a closer look at the city councillors’ portraits in order to draw them. A film set that looked like a children’s hideout was designed and each participant was then filmed as they said aloud the name of the city councillor they had drawn. At the end of the day, the participating children were encouraged to go home and talk to their parents about the kind of work they thought the person in their drawing did.

Date and time: Sunday, 23 June 2019, 10:00-15:00  
Venue: Arts Maebashi Studio Target group: Primary school students

Nude drawing for children (up to three-years-old)

Nude drawing for three-year-olds, a teaching method used in schools in Germany, was carried out in collaboration with Seishin Kindergarten in Maebashi City. In music, it is not unusual for children to learn techniques at an early age as a part of their supplementary education, but in the field of art, one technique in the early years may be drawing, which requires children to look at things carefully and perceive shapes. When children were faced with a professional art model who was posing, they were asking ‘What is the person doing?’ and saying, ‘The person doesn’t move’, sensing an unusual atmosphere where they got to experience drawing with an easel for the first time, in a proper art education setting. This experience brought about changes in their attitudes toward drawing, in that they spent much more time on their work than was usual.

Date and time: Tuesday, 25 June 2019, 10:00-12:00  
Venue: Hall at Seishin Kindergarten Target group: 2-year-olds, Seishin Kindergarten  
Cooperation: Seishin Kindergarten

Pricing artworks that were mass-produced on a conveyor belt

Some participants from the ‘Conveyor belt’ workshop then joined a ‘Pricing’ workshop where artworks that were created collaboratively in the former session were priced and sold in an auction-style format at mina, the museum shop in Arts Maebashi. The children interviewed gallerists, whose job is to sell artworks, about the process of pricing. They also experienced a simulated auction and decided the opening bid for the paintings should be 100 yen.

Date and time: Sunday, 30 June 2019, 14:00-15:00  
Venue: Galerie Suiran  
Target group: Interested participants of the ‘Conveyor belt’ Cooperation: Suiran Art Corporation, Ltd.  
\*The auctions were held from September 4 to 17. All profits from sales made were donated to an organization that supports single-parent families in Maebashi.

Share ‘funny stories’

Maebashi citizens of all ages, genders, and cultural backgrounds participated in this workshop, where each person shared the funniest event in their life. Later, in the manner similar to stand-up comedy, participants walked up to the theatre stage, and presented their episode without uttering a sound. Since the participants had heard every story during the first phase of the workshop, the voiceless performer automatically made the audience laugh as they remembered the stories, and they praised all performers on the stage with loud applause. As a video work, each performance looked like ‘telepathic’ communication, but in fact communication that was made possible only through the imagination.

Date and time: Saturday, 6 July 2019, 11:00-16:00  
Venue: Theatre 0, Maebashi Cinema House  
Target group: All ages Cooperation: Maebashi Cinema House



#### 近未来SF映画のワンシーンをつくろう

山本の作品展示室の作品を舞台セットに見立て《ビヨンド 2020 道徳と芸術》のワンシーンとして《ベルトコンベア》を使い、一時間で100枚の絵を描いた。

会期前には小学生対象のワークショップとして実施したが、この日は子どもから大人まで年齢を定めずに行った。

日時：2019年7月27日（土）11:00~12:00 / 15:00~16:00

講師：山本高之（アーティスト／本展共同企画）

会場：アーツ前橋 山本高之作品展示室

対象：子どもから大人まで

#### 山本高之とく群馬の森

山本高之と一緒に、群馬の森を散策し歴史的背景を持つ「ダイナマイトの碑」や「朝鮮人強制連行犠牲者追悼碑（「記憶・反省そして友好」の追悼碑）」をめくった。歴史的背景を持った道標や史跡の実物を目の前にして、それらをよく観察し、紙粘土を使って造形物をつくった。山本は専門家による解説を取り入れるのではなく、自らが新たな学びの場に立ち会者として参加者と共に現地を訪れた。

日時：2019年7月28日（日）13:00~15:00

講師：山本高之（アーティスト／本展共同企画）

場所：群馬の森（群馬県高崎市結貫町922-1）※現地集合・解散

対象：小学生

#### サーキットペンディングの世界【講義編】

音の出るおもちゃなどに組み込まれている電子回路を改造し、別の楽器にしてみよう「サーキットペンディング」を最先端の学びのあり方として関連イベントとして2回に取り上げた。

「講義編」では、正解のない自由なひらめきを通じてたったひとつの楽器を生み出すサーキットペンディングの世界観について日本において黎明期から活動を続けるサーキットペンダーのKaseo氏による、

参加型のレクチャーとライブパフォーマンスを開催した。

参加者はKaseo氏による自作楽器「神と対話するための装置」などを実演し、質疑応答も含めサーキットペンディングのあり方が「壊しながらつくられる」という経験から学びが生まれ新たな可能性が開かれることが語られた。

日時：2019年8月2日（金）18:00~20:00

講師：Kaseo

会場：アーツ前橋 山本高之作品展示室

#### 山本高之とアーツ前橋学芸員によるギャラリートーク

山本とアーツ前橋学芸員がそれぞれの展示内容について共に解説するギャラリートークを行った。

日時：2019年8月4日（日）、8月24日（土）各日とも14:00~14:30

会場：アーツ前橋 展示室

#### すいらん予備校生によるギャラリートーク

本展に協力いただいたすいらんが開設する美術予備校の受講生がアーツ前橋を訪れて山本と対面し、展覧会場で新たなワークショップが開発された。

山本からは宿題として「《ビヨンド 2020 芸術と道徳》の作品を使って、新たな物語を考えてくる」というお題が出された。10名の高校生は展示会場にて、それぞれが考えた物語をギャラリートーク形式で解説した。

会期を通じて新たなワークショップが立上り、アーティストと前橋在住の高校生との交流が生まれた。

日時：2019年8月16日（金）とも14:00~15:00

会場：アーツ前橋 展示室

#### トーク「国工と道徳」

「国工と道徳教育」をテーマに、教育の専門家によるトークイベントを開催した。

本テーマは山本の新作《ビヨンド 2020 芸術と道徳》のタイトルにも示されているように、義務教育の中で「多角的なものの見方を特徴とする〈国工・美術〉とひとつの規範を教えようとする〈道徳〉がともに行われている教育現場には矛盾はないのか？」という作家からの問いによって設定されたテーマでもある。当日は郡司氏がモデレーターを務め、4人の登壇者による自身の活動紹介並びに

それぞれの専門教科から見た国工・美術と道徳の共通点や相違点についての論点が提示された。

日時：2019年8月25日（日）14:00~16:00

登壇者：東良雅人（文部科学省初等中等教育局 視学官）、郡司明子（群馬大学 教育学部 准教授）、前島隆宏（群馬県教育委員会 義務教育課教科指導係 指導主事）、

岡田泰孝（お茶の水女子大学 付属小学校教諭）、久保信行（群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター 客員教授）※開演は当時

会場：アーツ前橋 スタジオ

#### おしゃべりアートデイズ

研修を受けたボランティア「アーツナビゲーター」がプランニングし選んだ収蔵作品1点と山本作品1点を、参加者と共に自由に作品について言葉を投げかけながら鑑賞するプログラムを実施した。

日時：2019年9月2日（月）～8日（日）※月火木金は14:00~14:30、土日は11:15~11:45

会場：アーツ前橋 展示室

#### サーキットペンディングの世界【実践編】

Kaseo氏を招いて行った「講義編」を経て、世紀マ3でシンセサイザー奏者でもある谷裏明文氏を講師に迎え、電子チャイムを使ったサーキットペンディングに挑戦するワークショップを行った。

電子工作経験の有無を問わず、小学生から中高生、ノイズミュージックに関心を持つ大人まで、幅広い関心と年齢層の方が参加した。

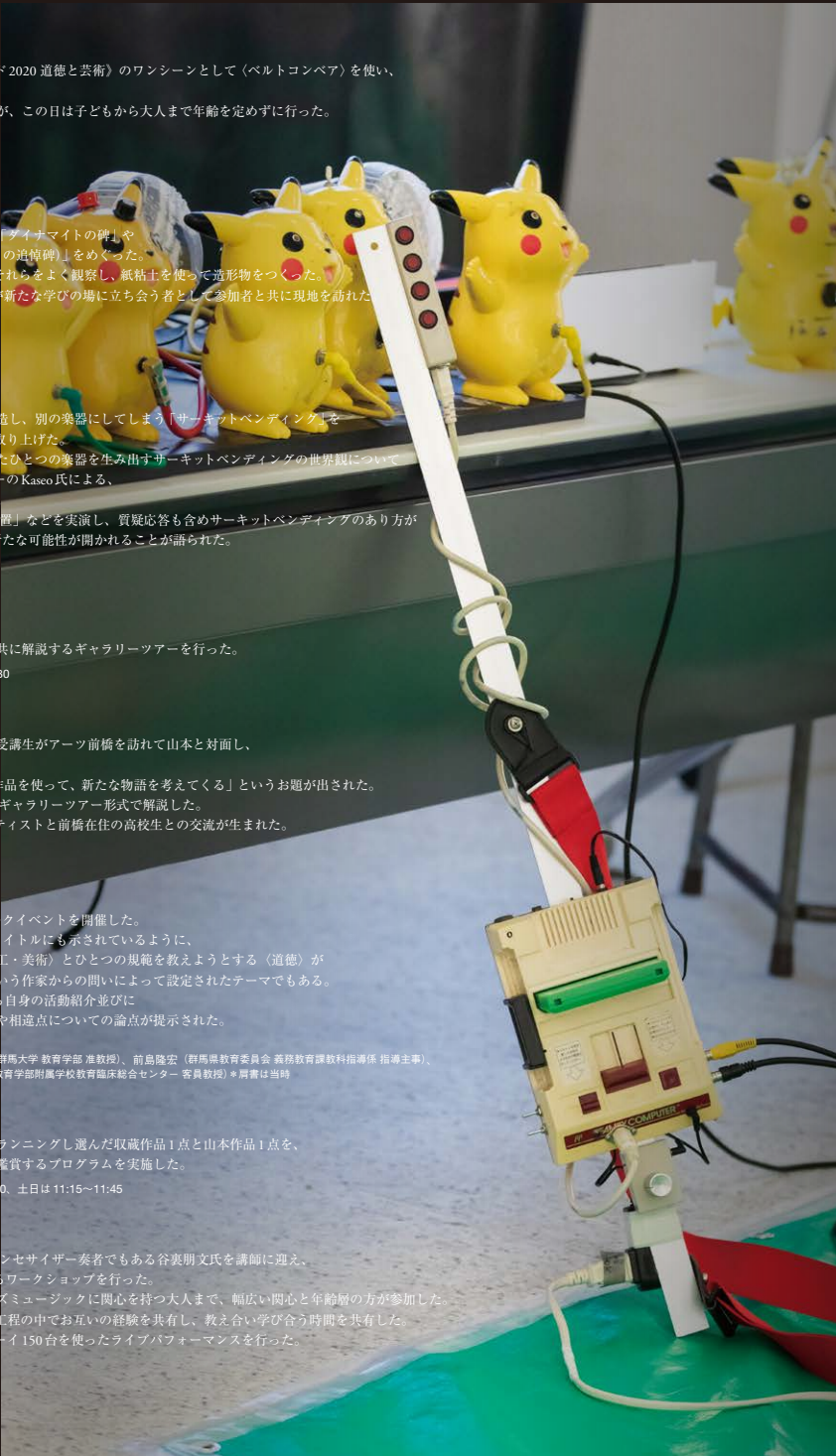
参加者は初めて取り組むサーキットペンディングの作業工程の中でお互いの経験を共有し、教え合い学び合う時間を共有した。

ワークショップの終盤には、谷裏氏が改造したゲームボーイ150台を使ったライブパフォーマンスを行った。

日時：2019年9月16日（月・祝）11:00~18:00

講師：谷浦朋文（世紀マ3）

会場：アーツ前橋 スタジオ



#### Create a scene for a near-future science fiction film

Participants shot a scene for an imaginary film, *BEYOND 2020: Morality and Art*, set in the room where Yamamoto's works, including Conveyor belt, were used to produce 100 drawings in one hour. Prior to the exhibition opening, a similar event was held with only primary school students; however, this event was open to all ages.

Date and time: Saturday, 27 July 2019, 11:00-12:00 / 15:00-16:00

Lecturer: Takayuki Yamamoto (artist and co-curator of the exhibition)

Venue: Exhibition room in Arts MaebashiTarget group: All ages

#### Gunma Prefectural Forest Park, guided by Takayuki Yamamoto

Together with Takayuki Yamamoto, tour participants strolled through the prefectural forest park, Gunma no Mori, and visited historic sites, such as the Dynamite Monument and the Memorial to the Victims of Korean Forced Labour, a monument for commemoration, remembrance and friendship. The participants observed the actual historical remains and sites thoroughly, and made sculptures out of paper clay.

As the guide, Yamamoto visited the sites without incorporating an expert's commentary. Instead, he tried to be a person who was facing new learning experiences, just like the participants.

Date and time: Sunday, 28 July 2019, 13:00-15:00

Guide: Takayuki Yamamoto (artist and co-curator of the exhibition)

Venue: Gunma no Mori (Gunma Prefectural Forest Park) (922-1 Watanuki-cho, Takasaki, Gunma, Japan) \*Start and finish from the siteTarget group: Primary school students

#### [Lecture] The world of circuit bending

'Circuit bending' is a way to modify one sound-emitting toy with built-in electronic circuits into a different musical instrument. In order to consider state-of-the-art learning methods, it was picked up as the subject of two related events. Kaseo, who has been active in Japan since the early days of circuit bending history, gave a participatory lecture and live performance regarding the world of circuit bending where a single instrument is created through free exploration and inspiration with no correct answers.

The lecture included the demonstration of Kaseo's self-made instruments, including a Device for talking with God, and a Q & A session. Kaseo explained how circuit bending opens up new possibilities for learning through the experience of 'creation while breaking'.

Date and time: Friday, 2 August 2019, 18:00-20:00

Lecturer: Kaseo

Venue: Exhibition room in Arts Maebashi

#### Gallery tour by Takayuki Yamamoto and Arts Maebashi curators

Yamamoto and Arts Maebashi curators explained the contents of the exhibition together.

Date and time: Sunday, 4 August 2019 / Saturday, 24 August 2019, 14:00-14:30 each day

Venue: Exhibition rooms in Arts Maebashi

#### [Workshop] Gallery tour by Suiran preparatory school students

Ten high school students, who were attending an art preparatory school established by *Suiran*, one of the exhibition's cooperators, visited Arts Maebashi to see Yamamoto and developed a new workshop in the exhibition room.

Yamamoto gave them a task to come up with a new story, based on the works exhibited in *BEYOND 2020: Morality and Art*, and they each explained the stories they had come up with in a gallery tour style.

Creating a new workshop together resulted in meaningful exchanges between the artists and Maebashi-based high school students.

Date and time: Friday 16 August 2019, 14:00-15:00

Venue: Exhibition rooms in Arts Maebashi

#### [Panel discussion] Arts and Crafts and Moral Education

This event brought education experts together to discuss issues on the theme of 'art and craft, and moral education'. As indicated in the title of Yamamoto's new work, *Beyond 2020: Morality and Art*, Yamamoto set the theme by posing the question: "Are there any contradictions in the field of compulsory education where both arts and craft, and morality are taught?" The former is characterized by a diverse view, whereas the latter aims to teach a single code of conduct.

With Ms. Gunji as a moderator, four speakers introduced their activities and presented arguments on the similarities and differences between art and craft, and morality from the perspective of their specialty.

Date and time: Sunday, 25 August 2019, 14:00-16:00

Speakers: Masahito Higashira (Educational Supervising Officer, Elementary and Secondary Education Bureau, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology), Akiko Gunji (Associate Professor, Faculty of Education, Gunma University), Takahiro Maejima (Supervisor, Subject Guidance Section, Compulsory Education Division, Gunma Prefectural Board of Education), Yasutaka Okada (Teacher, Ochanomizu University Elementary School), Nobuyuki Kubo (Visiting Professor, Centre for Cooperative Research and Development in School Education, Faculty of Education, Gunma University)

Venue: Arts Maebashi Studio

#### Oshaberi (Conversation) Art Days

This is a program planned by trained volunteers, known as 'Arts Navigators'. The Arts Navigator in charge selects two artworks: one from the collection of Arts Maebashi and one of Yamamoto's, and freely exchanged dialogue with the participants as they viewed the works together.

Date and time: Monday, 2 September through to Sunday 8 September 2019

\*14:00-14:30 on Mon., Tue., Thu. and Fri.; 11:15-11:45 on Sat. and Sun.

Venue: Exhibition rooms in Arts Maebashi

#### [Workshop] The world of circuit bending

Building on the lecture by Kaseo, Tomofumi Taniura, a synthesizer player in the band *seikima3*, led this workshop where the participants experienced circuit bending using electronic chimes.

People with a wide range of interests and ages, including children, high school students, and noise music fans, took part whether or not they had any previous experience in electronics. Many of the participants were undertaking the process of circuit bending for the first time, and were able to share their experiences while teaching and learning from one another.

At the end of the workshop, Taniura did a live performance with 150 Game Boys he had modified.

Date and time: Monday, 16 September 2019, 11:00-18:00

Instructor: Tomofumi Taniura (*seikima3*)

Venue: Arts Maebashi Studio







## BEYOND 20XX

明るいディストピアの時代に  
——「私たちにも選べる未来」のために

立教大学  
准教授  
小泉元宏



私たちは、明るいディストピアの時代を生きている。市場原理主義の土台のうえで、国家・都市・多国籍企業などによる生き残り競争のための排他的、独善的な利己主義が台頭している。目先の競争を勝ち抜くために、歴史の教訓と経験に裏付けられた専門知や市民知を圧倒的なまでに軽んじる無自覚なポピュリズムが溢れている。そして文化的・社会的マイノリティとみなされる人々は、消費の対象とされ、見世物化される場面以外では、経済的利益を上げるのに役に立たない存在として、もはや見えないもののようによびわれている。

往時の独裁者たちは、それがどんなに荒唐無稽な主張であれ、自身の思惑を雄弁に語った。アドルフ・ヒトラーは叫んだ。「猶太人は虚偽を以て勝つ真理と共に死滅する。猶太人は寄生蟲である」と。ところが現在の支配者たちは、表面上は「多様性」や「共助」、「共有」、「対話」といった理念を唱え、他者に対するおもてなしが大切だと笑顔で語りかける。だが実際には彼らは、障害者や高齢者、貧困層、児童、外国人労働者、あるいはボランティアの人々の一部など、隷属的立場に置かれやすい市民に、「協働」や「総活躍」といった名で下働きや、それに向けた訓練を強いる。のみならず、ときには支配者自らの広報役となることを要求することすらある。さらには市民たちが日々の労働をもとに貯めたわずかな金をこっそりと財布から抜き出して、自らの生き残り戦略に適合する「祭」や賭博場を作り、市民のための息抜きの場所をつくりだす。

何より悪いことは、市民が、そのような社会を自ら望んで楽しんでいることだ。今日における権力は、定められた規則に人々を従属させるためのものではない。フーコーが述べたように、人々の「生」そのものに介入し、管理しようとする。ゆえに私たちは無自覚的に、特定の目的、すなわち情動を商品化する資本主義における利益追求に向けて、感情を方向付けられている。YouTubeやInstagram、Facebook、Twitter、TikTokを通じて選ぶ音楽や映像、写真、そして、それらに「いいね！」ボタンを押すときの自らの感情まで、情動は制御され、特定の方向に仕向けられてしまっているのだ。「1984」、「ブレッドランナー」、「マトリックス」、そして「AKIRA」。多くのディストピア小説や映画、漫画・アニメが描いてきたような抑圧と不平等、そして管理が広がる社会に、私たちはいま、明るく楽しく生きている。

「山本高之とアーツ前橋のビヨンド 20XX ～未来を考えるための教室」において山本は、ミュージアムの教育普及プログラムを通じて美術・教育制度——権威者や市場の利害関係によって、収奪的・排他的な態度の下で構成されがちな制度——の矛盾と偽善を暴き出そうとした。近年のミュージアムでは、地域社会や子供たちなど、アート界以外の社会的諸主体との関係性を重視する傾向が見られる。それらは「教育」ではなく「ラーニング」などとも呼ばれ、「創造性」や「共有」、「対話」、「交流」などの重要性を強調する。山本の一連のワークショップと展示は、もっとも自由で創造的であるべき美術教育の領域を試験紙としながら、現代社会全体に広がる「明るいディストピア」の構造を糾弾し、問いかける試みである。

それだけではない。何より重要なことは、山本が不平等で搾取的な、そして、つまらない社会構造を変革するための実践の可能性をも提示しようとしている点にある。都合よく目的に向けて組織化するために、人々が「自ら望んで」特定の思想性に向かうように仕向けていく生・権力の支配構造に対して、SF映画やストリートカルチャーなどを通じた身振りをを使って、いわば気散じ的な対抗手段をとる。あるいはサーフィンという自然と身体の関係性のあいだに立つ術を通じて、硬直化した思考を無効化するような戦術を持ち込む。これらは、アートという、山本が言うところの「世界の見方を絶えず更新し、それまで気がつかなかった新しい視点を人々に提供し続けていく」力を通じて、私たちがディストピアを変革する可能性を持ちうるはずだという山本の思想、あるいは一縷の望みの現れでもある。

ただし山本の仕事は、用意された孵卵器の中で、子供たちの無邪気な表現を手放しで褒めるような従来の美術教育の態度とは大きく異なる。あえて「権力者」的な振る舞いや仕組みを装い、子どもたちに圧倒的な不条理や労務を強いることで、彼らのなかの（あるいは鑑賞者による）気づきや疑問、怒りを掘り起こそうとする。あるいは、美術という体系を教える側に立つ学芸員らを「ラーニング」する側に立たせ、制度によって身体化された彼らの当たり前の感覚に揺さぶりをかける。発する言葉の一語一語、心臓や筋肉、脳の動き一つ一つが、通常とは異なる身体的・思考的な回路を通ることによって、私たちに積み重ねられていく感覚こそが、明るいディストピアを転覆させるための萌芽を生んでいくことを可能とするからだ。このようなオルタナティブな身体感覚に直面したときの戸惑いと、せざるを得ない決断の連続のなかで、「多様性」や「対話」、「共有」といった権力者たちの表面的な謳い文句と情動の操作に踊らされることのない、今の瞬間を他者の生と共に生きることの難しさ、しんどさ、尊さ、そして、何より本当の楽しさのアクチュアリティが生起していく。

「AKIRA」の作者・大友克洋は物語のなかで、予知能力を持った子供である登場人物キヨコが東京を壊滅させるほどの強大な力であるAKIRAについて語るセリフを次のように書いた。「AKIRAの力は誰の中にも存在するわ。でも、その力が目覚めたとき、たとえその準備ができていなくても、その人は使い方を選択しなくてはならないの」と。選択するのは、「未来は一方向だけに進んでいるわけじゃ」なく、「私たちにも選べる未来があるはず」だからだ。だが、その選択の時期は、AKIRAが描く未来の舞台でもあったまさに2019年、すでに訪れている。山本が本展で大友の言葉を借りて述べたように、その時は「もう、始まっている」。山本が私たちに投げかけているのは、誰もが「選択」するための覚悟を持つことの必要性であり、その厳しさ、そして、それを通じた楽しさによって私たちの新たな可能性を見出し続けることの重要性なのである。

## 【引用文獻】

山本高之, 2019, 「FAC 0: BEYOND 20XX」(「山本高之とアーツ前橋のビヨンド 20XX」展), アーツ前橋  
アドルフ・ヒトラー (佐藤莊一郎訳), 1939, 「ナチとは何か」 青年書房  
大友克洋, 1988, 「AKIRA」(映画), アキラ製作委員会

# In the Era of Bright Dystopia

## For the Future We Can Choose

K o i z u m i M o t o h i r o

Associate Professor of Rikkyo University

We live in the era of bright dystopia. On a foundation of market fundamentalism and self-centred individualism, competition among nations, cities and multinational corporations has been rising. This short-term competition can breed an attitude of irresponsible populism, disregarding the historical lessons, views and experiences of ‘experts’ and citizens. Cultural and social minorities are often regarded as tools of consumption, or are treated as if they are no longer visible, useless for making economic gains.

The dictators of the past spoke eloquently of their own claims, no matter how absurd they were. Adolf Hitler exclaimed. “Jews win by deception and die out on the truth. Jews are parasites”. On the surface, however, today’s rulers espouse ideals such as ‘diversity’, ‘mutual aid’, ‘sharing’ and ‘dialogue’, smile and talk about the importance of hospitality towards others. In reality, they coerce vulnerable citizens such as the disabled, the elderly, the poor, children, foreign workers and some volunteers to partake in menial tasks or be trained to do so, in the name of ‘collaboration’ or ‘the dynamic engagement of all citizens’. Not only that, but at times they are even required to act as spokespersons for the rulers themselves. Today’s rulers also create ‘festivals’ and gambling halls that fit their growth strategies and create places for citizens to relax by covertly taking from their wallets what little money they have saved from their daily labour.

What is worse is that the citizens themselves wish for and enjoy a society as such. An authority in this modern society is not meant to make people strictly subordinate to rules. As Foucault once said, rulers try to intervene and manage people’s ‘lives’ themselves. Therefore, our emotions are unconsciously directed towards a specific purpose; capitalistic interest that commercializes human feelings. When we choose music, videos, and photos through YouTube, Instagram, Facebook, Twitter, or TikTok, and click a “Like” button, our emotions are controlled and lead in a specific direction. We are now living happily in a society, where oppressions, inequalities, and surveillance reign, and which are depicted in many dystopian novels, movies, manga and animation such as 1984, *Blade Runner*, *Matrix*, and *AKIRA*.

In the exhibition, ‘Takayuki Yamamoto x Arts Maebashi Beyond 20XX’, Yamamoto, through the museum’s educational dissemination programme, explores the contradictions and hypocrisies of the art and education system - a system that is often structured on the predatory and exclusive attitude of authority figures and market interests. In recent years, museums have tended to emphasise relationships with various social actors outside the art world, such as local communities and children. These museums activities are sometimes referred to as “learning” rather than “education” and stress the importance of ‘creativity,’ ‘sharing,’ ‘dialogue,’ ‘exchange,’ etc. Yama-

moto’s series of workshops and exhibitions are an attempt to condemn and question the structure of ‘bright dystopia’ which has widely spread throughout modern society, while he uses the art education field as a test paper where people should strive to be most liberated and creative.

There is more to it than that. Most importantly, Yamamoto also tries to present the possibility of practices to transform unequal, exploitative and trivial social structures. He takes a distractive counterbalance, so to speak, with a kind of populist language, and gestures through science fiction films and street culture, against the dominant structure of ‘bio-power’, which directs people towards a certain ideology ‘of their own volition’ in order to organise them towards a convenient goal. Or, through the art of surfing, which stands between the relationship between nature and the body, he brings in tactics that, so to speak, nullify this bio-power. These are manifestations of Yamamoto’s belief, or at least a glimmer of hope, that we have the potential to transform dystopia through the power of art to, as he puts it, “continually renew our view of the world and provide people with new perspectives that they had not previously been aware of”.

However, Yamamoto’s gestures are very different from the attitude of conventional art education, which praises children’s innocent expressions in a prepared incubator with open arms. Through Yamamoto’s methods, the curators who ‘teach’ the established system of art are then put on the side of ‘learning’, and their natural senses, which are embodied by the system, are shaken.

With Yamamoto’s approach, all participants thoughts, feelings, words and actions are born out of a different perspective, which gives birth to new experiences. The fruit of these actions and new experiences could pave the way for the overthrowing of this ‘bright dystopia’. Through Yamamoto’s tactics, and the challenge of manifesting his new perspective, the participants face a series of discomforts, and what manifests is actuality: the difficulty, toughness, respect, and enjoyment of sharing this moment with the lives of others. This state of being is not easily deceived by the falsehoods and emotional manipulations stated in the name of ‘diversity’, ‘dialogue’, and ‘sharing’ by those in power.

There is a line in Katsuhiro Otomo’s *AKIRA*, in which Kiyoko, a character in the story, a child with second sight, tells of *AKIRA*, whose power could destroy the whole city of Tokyo. Kiyoko states: “The power of *AKIRA* exists in everyone. But when that power awakens, a person has to choose how to use it, even if the person is not ready.” The choice needs to be made because “there is more than one direction in our future, and that means that each of us has a future to choose.” The story *AKIRA* was set in the future year of 2019; as Yamamoto quoted Otomo’s words at the exhibition, the time has “already begun”. Yamamoto has been expressing the need for everyone to be prepared to ‘choose’, and the importance of continuous efforts to find new possibilities through this challenge and the joy gained from it.

#### CITATION

Takayuki Yamamoto, 2019, “*FAC 0: BEYOND 20XX*” from exhibition *Takayuki Yamamoto x Arts Maebashi Beyond 20XX*.

Adolf Hitler (translated by Soichiro Sato), 1939, “*What is Nazi?*” Seinen Shobo.

Katsuhiro Otomo, 1988, “*AKIRA* the movie” Akira Production Committee.





## アーツ前橋 ARTS MAEBASHI



Photograph: Hajime Kato

## 山本高之 Takayuki YAMAMOTO

1974年愛知県生まれ。愛知教育大学大学院修了後渡英。ロンドン大学チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン修了。小学校教諭としての経験から「教育」を中心テーマのひとつとし、子どものワークショップをベースに会話や遊びに潜む創造的な感性を通して、普段は意識されることのない制度や慣習などの特殊性や、個人と社会の関係性を描く。近年は地域コミュニティと協働して実施するプロジェクトに多く取り組んでいる。2017年度に文化庁新進芸術家海外研修にてロンドン滞在。「国際芸術祭あいち2022」では、ラーニング・キュレーターを務めた。

主な展覧会に「ゴー・ビトウィーンズ展：こどもを通して見る世界」(森美術館ほか2014-2015)、コチ=ムジリス・ビエンナーレ(インド2016)。近年の個展に「山本高之とアーツ前橋のBEYOND 20XX 未来を考えるための教室」(アーツ前橋2019)、「山本高之のChildren of men」(アートラボあいち2017)など。近著に「芸術と労働」(共著、白川昌生+杉田敦福、水声社2018)がある。

Born in Aichi prefecture in 1974. Moved to England after completing the Graduate School of Aichi University of Education, and completed Chelsea College of Arts of the University of the Arts London.

Through his experience as a primary school teacher, 'education' is one of his prime themes. Yamamoto depicts the peculiarities of systems and customs that are usually unnoticed, and the relationship between individual and society, based on creative sensitivity latent in conversation and plays that are explored through children's workshops. In recent years, he has been working on many projects implemented in collaboration with local communities. In 2017, Yamamoto stayed in London as the selected artist for the Program of Overseas Study for Upcoming Artists. He was involved as a learning curator for Aichi Triennale 2022.

The main exhibitions include: 'Go-Betweens: The World Seen through Children' (Mori Art Museum and others, 2014-2015), and Kochi-Muziris Biennale (India, 2016). Recent solo exhibitions include: 'Takayuki Yamamoto x Arts Maebashi BEYOND 20XX' (Arts Maebashi, 2019), 'Takayuki Yamamoto: Children of men' (Art Lab Aichi 2017). Recent publications include: 'Art and Labor' (Co-authored, edited by Yoshio Shirakawa and Atsushi Sugita, Suseisha, 2018).

## アーツ前橋 Arts MAEBASHI

ここは芸術文化活動の支援や振興を担う施設です。私たちは、表現をすること、お互いを理解することはすべての人にとって大切なものだと考えています。芸術文化が地域に何を生み出し、もたらすのかをみんなで考え、アーツ前橋が誰にとっても必要な場所になってもらえるように願っています。そのために、私たちは以下の3つを活動のコンセプトとしたいと考えています。

芸術・文化は芸術家や一部の関係者だけではなく、それを楽しみ、語り、伝えていく多くの人たちがつくりあげていくものです。ぜひ、私たちの活動を多くの方にご理解いただき、ご支援を頂きますよう、よろしくお願いいたします。

This institution is responsible for the support and promotion of artistic and cultural activities. We believe that it is important for everyone to express ourselves and understand each other. We all work together to think about what arts and culture can create and bring to the community. At Arts Maebashi, we want to be an essential place for everyone. In order to achieve this, we would like to introduce the following three concepts that underpin our activities: Art and culture are created not only by artists and other relevant parties, but also by the many people who enjoy the concepts, talk about them and share them with others. We aim to reach more and more people with our activities. We really appreciate your continued support.

### 創造的であること creative

個人の考えを表現することは、異なる考えを持つ人たちが共存していく現代社会で今後ますます必要とされます。他の誰とも違う、独自の感じ方や考えを創造的に表現して人に伝えることは、ひとつの価値だけでなく、いろいろな価値を認めていくことにもつながると考えています。

### To be creative

The need for individuals to express their own ideas is increasing in our modern society, where people with different ideas coexist. We believe that creatively expressing and sharing your unique feelings or thoughts with others will lead to the appreciation of not just one value, but many different values.

### みんなで共有すること share

文化も芸術もみんなが当事者です。多くの人が関わることで、じっくりと時間をかけて文化や芸術の魅力は磨き上げられ、かけがえのないものになっていきます。子供から老人まで、芸術が好きになる人も苦手な人も、みんなが未来の文化の担い手となることができます。

### To share with everyone

Everyone is a player in both the arts and culture. When a large number of people participate, the charms of culture and art are slowly refined over time, becoming irreplaceable. Everyone, from the young to the old, from the art-loving to the art-phobic, can be cultural players of the future.

### 対話的であること dialogues

ここで人が出会い、それぞれが個性を活かし対話をする場所になって欲しいと考えています。そこから、新しいアイデアがたくさん生まれ、きっとそれらはみんなの生き方になっていくのではないのでしょうか。

### To be open to dialogue

We would like this institution to be a place where people can meet and engage in dialogue as they encourage each other's individuality. Our belief is that this is how many new ideas are generated, and become a source of strength for everyone in life.

# Produced by Takayuki YAMAMOTO

## 展覧会概要

山本高之とアーツ前橋のビヨンド20XX 未来を考えるための教室

会期：2019年7月19日(金)～9月16日(月・祝)

会場：アーツ前橋 地下ギャラリー

開館時間：10時～18時(入場は17時30分まで)

休館日：水曜日

観覧料：一般500円／学生・65歳以上・団体(10名以上)300円／高校生以下無料／1階ギャラリーは無料

(「Art Meets 06: 門馬美喜 | やんづー」展と共通)

\*障害者手帳等をお持ちの方と介護者1名は無料 \*児童扶養手当証書をお持ちの方は無料 \*「わくわく子どもまつり」開催の8月10日(土)は無料

\*「国際識字デー」の9月8日(日)は無料 \*猛暑割：最高気温35度以上の日にご来場された方は観覧料300円

主催：アーツ前橋

協力：群馬大学教育学部 美術教育講座 株式会社すいらん 学校法人清心学園 清心幼稚園 前橋シネマハウス

## Exhibition Information

Takayuki Yamamoto x Arts Maebashi Beyond 20XX

Friday, 19 July 2019 – Monday, 16 September 2019

Venue: Arts Maebashi Basement Gallery

Open hours: 10:00–18:00 (entry up to 30 minutes before closing)

Closed on Wednesdays

Admission fee: Adult: 500 yen, University students and 65 or over: 300 yen, High school students and younger: free

Groups of 10 or more: 300 yen per person

Admission free for Gallery 1 (1st Floor)

(Common ticket for 'Art Meets 06: Miki Momma | yang02')

\*Admission free for visitors with a disability certificate and for one accompanying person

\*Admission free for visitors with a child-care allowance certificate

\*Admission free on 10 August (Waku Waku Children's Festival Day) and 8 September (International Literacy Day)

\*Hot-weather discount (35°C and above): 300 yen

Organizer: Arts Maebashi

Cooperation: Art Education Course, Faculty of Education, Gunma University; Suiran Art Corporation, Ltd.,

Seishin Kindergarten; Maebashi Cinema House

## 展覧会

企画・構成＝山本高之／アーツ前橋(住友文彦 今井 明 沼下桂子)

グラフィックデザイン＝濱祐斗

会場施工＝有限会社ディ・カールトン

輸送陳列＝日本通運株式会社 群馬支店

展示補助＝金井佐和子

共同制作＝山本千愛

## 記録集

企画・構成＝山本高之

編集＝沼下桂子

執筆＝山本高之 神野慎吾 郡司明子 杉田 敦

小泉元宏 萩前知子 若山満大

英文翻訳＝本多康紀

ネイティブチェック＝加藤久美子 & ケリー・ニッセン(ペングイン翻訳)

デザイン＝濱祐斗 & 山口真生

写真＝木暮伸也 (P60,61の一部は美術館スタッフによる撮影)

印刷＝朝日印刷工業株式会社

発行日＝2023年3月31日

発行＝アーツ前橋 ©アーツ前橋 2023

\*許可のない無断転載・複製を禁止します

## Exhibition

Planning and direction by Takayuki Yamamoto

/Arts Maebashi (Fumihiko Sumitomo, Tomo Imai, Keiko Numashita)

Graphic design by Yuto Hama

Venue construction by D-Carton Inc.

Transport and display by Nippon Express Co., Ltd. Gunma Branch,

Exhibition assistance by Sawako Kanai

Co-production by Chiaki Yamamoto

## Publication

Planning and direction by Takayuki Yamamoto

Editing by Keiko Numashita

Contributors: Takayuki Yamamoto, Shingo Jinno, Akiko Gunji,

Atsushi Sugita, Motohiro Koizumi, Tomoko Yabumae,

Mitsuhira Wakayama

English translation by Yasunori Honda

Native check by Kumiko Kato & Kellie Nissen (Penguin Translation)

Book design by Yuto Hama & Mai Yamaguchi

Photographs by Shin'ya Kikura

Printed by Asahi Printing Industry Co., Ltd.

Published by Arts Maebashi on 31 March 2023

© Arts Maebashi 2023

\*Unauthorized reproduction or reprinting without permission is prohibited.

日本の文化を世界へそして未来へ  
～次世代に誇れるレガシー創出のための文化プログラム～

**beyond 2020プログラム 認証事業**





**BEYOND 20XX** から現在までの  
アーツ前橋での主な出来事

*Principal events at Arts Maebashi  
from BEYOND 20XX to the present*



***Produced by Takayuki YAMAMOTO***

# BEY ON 2020

